

---

**魔法少女リリカルなのはStrikerS ～ 転生したら魔法？がある世界だった～**

D-5

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers ～転生したら魔法？がある世界だった～

### 【Nコード】

N9643W

### 【作者名】

D-5

### 【あらすじ】

空から落ちてきた豆腐の角に頭をぶつけ死亡した男。しかも記憶喪失というオマケ付き。

彼は神のミスによって死亡したのでお詫びに転生することになった。でも転生した世界には魔法というものが存在していた。

「よし、魔法つてのがどんなものかは理解した。でもな、砲撃や殴る斬るは魔法なのか？」

これはそんな彼が新たな世界で生きていく物語である。

## プロローグ（前書き）

初めましての人は初めまして、そして知っているという人はこんにちはわ。どうもD・5です。

今、書いている作品があるのに何をトチ狂ったのか新しい小説を始めることになりました。  
初の転生物なので少々不安ですが。がんばっていきますのでよろしく願います。

ではどうぞ。

## プロローグ

「サーセンしたぁー！ー！ー！ー！」

「は？」

ふと、目が覚めると真っ白な空間で茶髪のチャラ男が土下座していた。見事な土下座だな、どれ、そこにあった石の板を乗せてみよう。

「何が？」

「つて、ナチュラルな反応しながら石を乗せないでください！」

「いや、見事すぎる上にすぐそばに拷問器具があったら誰でも使いたくなるだろ？」

「なりませんよ！」

む、そうか……残念だ。

「で、お前は何を謝っているんだ？」

「す、すみません！わ、私の失敗であなたを死なせてしまいました  
！！」

随分と礼儀正しいチャラ男になって……え？

「死んだ？俺が？」

「は、はい……………」

「はぁ——————？！」

真っ白な空間に俺の声が木霊した。

「落ち着けましたか？」

「ああ」

実際は混乱しているがな。

「で、何故俺は死んだんだ」

「説明させていただきます。事の始まりは……………」

「長すぎるは却下だ、三行以内にしろ」

「……………簡単に言うと

・パソコンで人間の情報を確認していた

・その時くしゃみをしてしまい間違っ  
て貴方のデータを消去して  
しまった

・貴方は死亡した

ということになります」

「うん、ツツコミ所はいろいろあるがまずは言わせる。バックアップくらい取れよー!」

「え、ツツコムところはそこっ!？普通は書類じゃないのかよ、とかじゃいんですか!」

「紙媒体は時代遅れだ!」

「うわー」

まったく仕事してるんだったらバックアップくらい取れよ。

「で、俺の死因は何なんだ。事故死か、それとも他殺か?」

「え、えっと……」

何を口籠っているんだ、コイツは。

「さっさと答え」

「は、はい死因は……豆腐の角で頭を打って頭部が破裂したことです」

「……はい?」

「豆腐だと?」

「実は、貴方が立っていた場所の遙か上空でスカイダイビングをしている人たちが『飛びながら豆腐は食えるのか!』という実験をし

てまして……上空からの落下して付いた速度が破壊力に変わり、その下にいた貴方の頭を……」

「木っ端微塵かよ……」

「はい……」

まさか、豆腐の角で死ぬなんて漫画でもありえねえぞ。てか……

「スカイダイビングしながら豆腐食うんじゃねえ—————  
!」

はぁ……それよりもだ。

「お前誰？」

「今更!？」

「そして俺は誰だ？」

「そしてかなりヤバいことになっていた!？」

「なるほど、神か……信じられんな」

「そうですね、同窓会で久々に会った友人たちによく言われま  
す」

まあ、どつからどつ見てもチャラ男だしな。日サロやめたらいいんじゃない？

「あ、これ地です」

「そつか………」

色黒なんだな。

「で、俺はどうなるんだ。このまま三途の川行きか？」

「いえ、ミスで貴方を死なせたとはいえ寿命がかなり残っていたので、このまま転生してもらいます」

「転生？てか後寿命どん位残ってたんだ俺？」

「確か、後………百二十年くらいですね」

「ながっ!?!」

「ええ、人間の長寿記録を軽く塗り替えてますね。しかも死亡直前までバク宙ができるくらい元気な老人になる予定でした」

「スゲエな俺!?!」

死んだのが何歳なのかは忘れたが、普通はボケてベットの上だぞ。妖怪か俺は。

「まあ、それはどうでもいい。で、転生ってどういうことだそのま

ま生き返れるのか？」

「いえ、天界のデータバンクから貴方の情報は一切無くなってしまいましたので元の世界へ生き返らせるのは無理です。できたとしても……」

「ああ……」

頭が木っ端微塵だもんな……生き返った直後にまたお陀仏だよ。

「ということで別世界に転生してもらいます」

「別？」

「はい、あなた方の世界というアニメの世界ってやつです。しかもバトルもの」

「ほう……」

つまり戦闘がある世界なのか。

「オマケに能力も付けましょう。残っていた寿命分の力を」

それってかなり凄いいんじゃないか、百二十年分だし。

「どんなのがいいですか？超人的な力やどんな問題でもどんなことでもできる天才的な知能と才能何でもありますよ」

「いや、どんなのがいいと言われても記憶が無いしな……」

生前の俺はオタクなのかもわからんし。

「ああ、そ、そうでしたね……………では、ランダムに決めましょうか。はっ！」

チャラ男が手の前にかざすと煙と共に何か出てきた、あれは……………  
・ルーレット？

「そうですダーツは一本、寿命十年となります。貴方の寿命分だと十二本ですね」

「お、おう」

十二本のダーツを渡される。ダーツなんかやったこと無いぞ……………  
・多分。

「では、どつぞー！」

とりあえず投げてみるか……………二本同時に。

「よっ」と

ストトッ！

「い、一気に投げますか……………えーと、おお！いいのに当たりましたね」

「そっなのか？」

「ええ！」

ふむ……まあそういうならいいものなのだろう。

「それでは後十本ですよ！」

「……いらね」

「え？」

「いらねえよ。有利になる力がありすぎると人生がつまなくなる」

困難があつてこそその人生だ。

「でも、残りは……」

「ああ……一本は金運に使ってくれ。残りはそうだな……」

「……」  
どうするか……。

「俺の家族はどうなってるんだ？」

「か、家族ですか？妹さんが一人だけです、ご両親は……既に他界してますね。随分と大変だったみたいですね。兄妹二人だけで必死に生きていたみたいですよ」

「そうか……」

妹がいたのか……だったらこう使うか。

「なら残りのダーツは全部妹に使ってくれ」

「へ？い、妹さんにですか？」

「そうだ、妹にだ。足りないか？」

「い、いえ、全然！」

だったら良かったぜ。

「じゃあ、それで頼むぞ」

「え、あの？本当によろしいのですか？」

「構わなねえよ」

「……………わかりました、残りのダーツは妹さんの幸福にまわします」

「それでいい」

これで思い残りはねえ。

「それでは転生してもらいます」

「おう、頼む」

「はっ！」

ガシヨンッ

「ん?」

何故俺は固定されているんだ?そして何だ、あの大きな大砲は、どう見ても戦艦の主砲じゃないか。

「それでは、いい来世を!」

「ちょっと待て!まさかこのまま」

「てえーーーーー!!!」

「やっぱりこうなるのかよチクシヨーーーーーッ!!!」

チユドーン!

俺の目の前は真っ暗になった。

「まったく面白い人ですね……前に来た男に比べたら雲泥の差ですよ」

残ったダーツを中に浮かべ見つめる。

「これ一本があれば世界を救うほどの奇跡の力があるというのに……」



え？ちよ、ここはどこだ？そして体が動かせねえ！

「おしめではないし……お腹が空いたのから？なら……」

む、なんだ、この口に当たるものは。

「あれ？違うの……だったら何かしら」

むう……よく見えんな。どうなっているんだ俺の体は。

「今度は大人しくなった……おしめでもないしおっぱいでもない……ふふ、よくわからない子ね、でも可愛いわ」

……さつきから聞こえるおしめやおっぱいという単語、まさかだが……俺。

「私の愛しいヴィント」

赤ん坊になつてるのかぁ—————!?

「おぎゃ—————」

「あ、あらあら？今度は何かしら」

こうして俺の新たな人生が始まったのであった。

## プロローグ（後書き）

こんな感じですよ。今回はプロローグなので短いですが。次回からはできれば五千文字位で書けたらいいと思います。

更新は他に書いている作品もありますので交互になると思いますのでご了承を。

では、こんな未熟な作者ですが精一杯書いていきますのでよろしく  
お願いいたします。

欲しいとは言った、だがやり過ぎだろう。これ……（前書き）

書きあがったので投稿します。

欲しいとは言った、だがやり過ぎだろう。これ……

やあ、新しい人生を謳歌している豆腐の角で頭を打って死に転生した男、ヴェント・カグラだ。今俺が思ったことを言おう、それは……。

やり過ぎだチャラ男ーーーーー!!!

この世界に生まれて早七年……え？その七年の間はどうしただつて？ハハハ……言えるわけないだろう、俺にとって黒歴史なんだよあの時間はおしめを変える時や食事の時間のときは。これ以上は喋りたくないんだよわかるか？

まあいい、話を戻そう。あのチャラ男やり過ぎだ、確かに俺は金運が欲しいとは言ったがさすがにこれはやり過ぎだ。

俺が生まれたカグラ家は一般的な中流家庭だったのに、俺が生まれた途端……。

・宝くじが当たった、金額は良く知らんが一等から五等まで総なめ、かなりの大金だったらしい。

・その金を元に会社を始めたら大成功。

・今やその業界を代表する大企業となった。

な、やり過ぎだろ。俺が言ったのは生活する分に困らない程度の金運が欲しいって言ったんだがな……まあ、会社が成功したのは多分母さんの手腕のおかげなんだろうけどな。

「どうしたのヴェント、ため息なんてついて、何か悩み事？」

「うづん、なんでもないよ母さん」

この世界の俺の母親、シルフィーヌ・カグラ（2ピー）歳・・・年はこのとおり言えないが一児の母とは思えないくらい的美貌を持つ人だ。てか、どつからどう見ても中学生にしか見えないんだよな・・・俺の親父はロリコンだな、うん。

ちなみに父親の顔は知らん。前に一度聞こうとしたら・・・

「父親ね・・・いるんじゃないかしら。どつかに」

と言われた。その時の母さんの身体からは凄まじいほどの怒気が溢れ出ていた。

後に母さんの友人から聞いた話なのだが、俺の父親は俗にいうヒモというやつらしく、世界中に女を作っているんな所を転々としているらしい。・・・ヒモでロリコン、最悪だな。

「あ、ヴェント、そろそろ学校に行かないと危ないわよ」

うおっ、もうそんな時間か。

俺は残ったトーストを口に詰め込み、カバンを持ち玄関へ向かう。

「じゃあ、行ってきます」

「はい、行ってらっしゃい」

母さんに手を振り外に出る。さて、行くか学校に。

さてここで俺が転生したこの世界で一番驚いたことを教えよう、それは・・・。

魔法というものが存在するのだ。

最初は信じられなかったさ、だが母さんに実物を見せられて信じざろうをえなかった。

このミッドチルダという世界は魔法文化によって発展した世界だ。母さんの会社もこの魔法文化があるから成り立っているらしい。魔法を使うためのツール、デバイスという物を作っているらしい。原理はよくわからないが、そのおかげで生活できるんだ、ありがたい事だ。

そして俺が住んでいるのはミッドチルダ首都、クラナガンだ。ここクラナガンには時空管理局ミッドチルダ地上本部がある。え？時空管理局ってなんだだって？そういえば説明してなかったな。

時空管理局、いくつもある次元世界、つまりこのミッドチルダと同じような星からロストロギアという危険物の規制と質量兵器の根絶を目標とした組織だ。

簡単に言うと次元世界の警察みたいなもんだ。その本部がここにあるのだ。

「おっはよー少年」

「む、おはよう」

学校までの道のりの途中、青い髪の女性と戯つのおっさん……男性に話しかけられた。

「おはようございますクイントさん、ゼストさん」

青い髪の女性の名前はクイント・ナカジマ、おっさんはゼスト・グライツ。先ほど説明した管理局の局員だ。そして母さんの旧友らしい。

「相変わらず礼儀正しいね、あの子とは大違いだね」

「お前はもう少し落ち着きを持って。ヴェントを見習え」

「ちよっ！それは酷いですよ隊長」

相変わらず賑やかな人だなクイントさんは、そしてこっちも相変わらずダンディーだなゼストさん。

「あの学校がありますので行っていいですか？」

「む、ああ、引き止めてしまつてすまん」

「いいえ、大丈夫です。それでは・・・」

「うむ、行って来い」

「いつてらっしや〜い」

二人にお辞儀をしてその場を去る、これも朝の日課だ。この時間に来るといつもあの二人がいる、どうやらパトロールコースと重なっているみたいだ。

まあ、そんなことよりも学校に行かなければな。時間も危ないし

少し走るか。

足に力を入れて地面を蹴り前へ出る。さて、間に合えばいいのだがな。

「ふう……間に合ったか」

走ること十分、閉門五分前だ。どうやら間に合ったみたいだな。走るのを止めて歩きに変える、朝から無駄な体力を使ったな。む、後ろから何か来るな。

「おっはよー！ー！ヴェン……とうっ！！」

「……………(ヒョイ)」

「つて、あらあ~~~~?！」

いきなりとび蹴りをかましてきた馬鹿を避け、馬鹿は勢いずいたまま地面を滑っていった。

「……………行くか」

「待てよ！」

「何のようだカカオ、朝から傷になって」

「お前が避けるからだろう！」

朝からうるさいやつだ。コイツはカカオ・ココナッツだ。特徴は馬鹿、以上。

「もうちよっとマシな説明しろよ！」

「うるせえ、事実だろ」

「何を！天才の俺様に向かって馬鹿とは何だ！」

「 $2 \times 5$ は？」

「7！」

「馬鹿だ、コイツ」

「何故だ！？」

足し算と掛け算を間違えてる時点で馬鹿なのは確定だろう。

「お、俺様は戦闘の天才なのだ！」

「その天才のどび蹴りは簡単に避けられるのだが」

「……………(、……………」

相手するのも面倒だし放っておくか。

「ちょ、ちよっと待てよヴェント！」

うるさい、着いてくんな。

「ん？あれは……」

授業も終わって帰ろうとしたとき見覚えのある顔が校門の前に立っていた。

「ん？どうしたヴェント、敵か」

「黙ってる馬鹿」

「なんだとー！ー！」

あいつが待っているってことは母さんが、メールくらいくれよな、まったく。

「じゃあ、俺帰るわ」

「え？ちよっ、ヴェント!？」

カバンを背負って校門へ向かう。馬鹿が何か言っているがどうせ大したことは無いだろうし、先を急いだ。

「どうしたクラウド」

「これはヴェント様、お帰りなさいませ」

俺に頭を下げる初老の男性、彼は母さんの会社の専属運転手のク  
ラウスだ。母さんが俺を会社に呼び寄せるとき、いつも迎えに来る  
のだ。

「また母さんが？」

「はい、社長がお呼びです」

「わかった」

「では、どうぞ」

クラウスがリムジンの後部座席のドアを開け、俺は乗り込む。て  
か、いつもリムジンで来るなって言ってるのにな、邪魔になるだけ  
なのに。

「では参ります」

エンジンに火が入りリムジンはゆっくりと動き出した。今日は何  
の用件なんだろうな、実験でもないだろうし……まあ行けばわ  
かるだろう。

俺は窓から見える景色をただ眺めるのだった。

会社のビルに着いたらクラウスに礼を言って、社長室に向かう。

「来たよ母さん」

「いらっしやいヴェント、ごめんね急に呼び出したりして」

「いいよ。で、今日は何？」

「あ、今日はね」

「やつほーヴェント君。今朝ぶり」

「クイントさんにゼストさん？」

「なんでこの二人がここにいるんだ？」

「仕事ですか？」

「ああ、デバイスのことだな」

なるほどそういうことか。うちの会社はデバイスの開発・研究を行っている会社だ管理局にもうちのモデルが配備されているらしい。

「ん？だったら何で俺は呼ばれたの母さん」

「ああ、ヴェントには悪いんだけどクイントの相手してくれない？  
ちよっと煩くて困るのよ」

「はあ・・・またか。」

「ちよ、ちよっとシルフィ私が相手するんじゃない、相手しても  
らうの！??普通逆でしょ」

「だってクイントちゃん。さっきから全然落ち着き無かったじゃない、話聞いてなかったし」

「うぐっ！」

「それにお前よりもヴェントのほうが落ち着いているところがあるしな」

「た、隊長まで……」

ガツクリと頭を落とすクイントさん。仕事なんだからもっと真面目にやれよ局員。

「い、いいわよ相手になってやるうじやない！行くわよヴェント君！」

「わかりました。母さんテストルーム借りるね」

「いいわよ。今なら二番が空いているから、母さんが連絡入れておくわね」

「ありがとう」

クイントさんに引っ張られて、社長室から出る。すると頭の中に声が響いた。念話か……。

念話って言うのは一種のテレパシーみたいなものだ。魔法の初歩で素質のあるものだったら誰でも使えるらしい。

『ヴェント、わかっているだろうけど』

『わかってるよ、アレ（・・・）は使わないよ』

アレ（・・・）、俺が転生する際に得た、能力のことだ。母さんはそれを管理局には隠しておきたいらしい。何故かは知らんが母さんが言うのだからそうしたほうがいいだろう。

『そう、ならよかったわ。怪我には気をつけてね』

『それはクイントさんに言って』

『フフ、そうね。じゃあがんばって』

母さんはそう言うと念話を切った。クイントさんに引つ張られて第二テストルームにたどり着く。ここはできたばかりのデバイスのテストをする場所でかなり頑丈な部屋で俺もよく使っている。

「さーて、どれだけ強くなったか見てやるわ」

「お願いします」

トレーニングウェアに着替えた俺は構えを取る。同じくウェアに着替えたクイントさんも構えを取った。

何をするのかというと格闘の稽古だ。俺は護身術程度に武術を始めたのだが、時折クイントさんに稽古をしてもらっているのだ。クイントさんはシューティングアーツという格闘技法の使い手だ。実際まだ一度も勝ったことは無い。

「さあ、かかってくるなさい」

「……………いきますっ!!」

地面を蹴り俺は跳んだ。

「うん、かなり良くなったわね」

「ゼー……………ゼー……………」

く、くそ……………全然有効打が入んねえ……………。体格差もあるけど、やっぱりこの人強いわ……………。

「死角から入ってくる攻撃もいいけど、もうちょっと絡め手を用意したほうがいいわね。あと攻撃がまだ直線的だったわよ」

「は、はい……………」

まだ直線的だったか畜生、だいぶマシになったつもりだったんだけどな。

「でも前見た時よりもかなり上達してたわよ。これからも頑張りなれよ」

「はっ」

はあ……訓練メニューの見直しだな。

「ヴェント君も強くなったわね。十歳になったらこれに出れば？」

ん？何だこれ？

クイントさんが出した投影型のウィンドウには『デーメンジョン・スポーツ・アクティビティ・アソシエーション(DSAA)公式魔法戦競技会』と書かれていた。

「何ですかこれ？」

「あら？知らないのかしら、この大会はね昔私も出たことのあるんだけどかなり大きい大会でね。色んな管理世界から魔術師が集まってる互いに己の技量を競い合うのよ。あく懐かしいわね。メガ・又とシルフィとの青春の日々」

「へへそうなんですか。まあ出るつもりも無いんですけど」

「え？そうなの」

「はい」

あまり目立ちたくないしな、それに武術だって護身術にと思ってやってるからな。

「そう、残念ね。まあ出たくなったらいつでも言ってるね」

「はい」

出るつもりは無いが頷いておこう。

「おい、クイントそろそろ戻るぞ」

話しているとゼストさんがテストルームに入ってきた。

「あ、隊長。待つててくださいすぐに着替えてきますから」

急いで更衣室に向かうクイントさんを俺達は見送くとゼストさんが話しかけてきた。

「ヴェント君、クイントのことを頼んですまなかつたな」

「いいえ、稽古をつけてもらったのでいい経験でした」

「そうか」

厳つい顔して結構優しいんだよなこの人。クイントさんが言うにはかなり強い騎士みたいだけど、戦ったことが無いからわからないが。

「お、お待たせしました・・・」

本当に急いで着替えたみたいで髪もボサボサなクイントさんが部屋に入ってきた。制服の上なんかボタン掛け違えてるし。

「はあ・・・身だしなみくらいしっかりしておけ」

「え？あ、すみません・・・」

相変わらず慌しい人だな。

「では失礼したな」

「次ぎ会うときも楽しみにしてるわよ」

「はい、クイントさんありがとうございます」

テストルームから出て二人を見送る。ロビーまで行きたいところだがトレーニングウェアのままだしな。

「ではな」

「じゃあね」

二人が見えなくなった。さてまだ時間はあるし、もつちよっと身体を動かしておくか。

次こそはクイントさんに有効打を当ててやる！

欲しいとは言った、だがやり過ぎだろう。これ……（後書き）

書きあがったのはいいんですけど特にナカジマ姉妹が来た年やクイントたちがいなくなる事件の年が。

次回の更新は少し遅れるかもしれませんが。

では次回の更新で。

決心はついた。だが……奴らとは関わりたくないな、マジで。

(前書き

息抜きにちょっと書いていたら、書きあがってしまった……まあいいか。

決心はついた。だが……奴らとは関わりたくないな、マジで。

時が過ぎるのは早く俺は十歳になった。アレから三年間特訓し、武術の進歩もかなりあり近所にあるストライクアーツの道場で相手になる人物は数える程にしかない、そろそろクイントさんに有効打を当てられると思っていたのだが……それは叶わなくなった。なぜなら……。

「何で……死んじゃったのよクイントちゃん!!」

クイントさんが死んだ。それは突然やって来た連絡で分かったことだった。

「……………」

棺桶の中で静かに横たわるクイントさん、肌は土気色になっていて微動だにしない。信じられないが死んでいるのだ。

「う、うう……………」

棺桶に縋り付き泣いている母さん。俺は母さんが泣いている姿を見るのは初めてかもしれない。

「クイントさん……………」

また、稽古してくれるんじゃないかなかったのかよ。俺強くなったと思っただけ。

心の中でそう語りかけるが、誰も答えてはくれない……………。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

死んだのはクイントさんだけではない、彼女が所属する部隊が全滅したそうだと、つまりゼストさんもだ。

さらにメガー又さんという母さんの友達も行方不明らしい。メガー又さんは俺も何度も会ったことがあったので覚えている。しかも三歳の娘さんがいたはずだ。

「グスツ、グスツ・・・・・・・・！おかーさん・・・・・・・・」

「う、うう・・・・・・・・！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

クイントさん、子供いたんですね。なんで話してくれなかったんだろな・・・・・・・・でも理由はもう聞けないか。

「クイントさん・・・・・・・・」

俺は持っていた花をクイントさんのそばに置き。

「さようなら・・・・・・・・」

別れを告げたのだった。

「ねえ、母さん」

「何？ヴェント」

クイントさんの葬式の帰りの車の中、俺は決意したことを母さんに告げることにした。

「俺、管理局に入りたい」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

何も言わない、怒っているのか呆れているかは分からない。

「そう・・・・・・・・でも何で？」

「クイントさんの姿を見てそう思った・・・・・・・・」

「クイントちゃんのこと？」

「いや、正確に言えばクイントさんの家族の姿が」

クイントさんの遺体に縋り付き泣く小さな女の子と必死に涙を堪える姉と思える女の子、そして悲しそうにしているクイントさんの旦那さんのゲンヤさん、その三人の姿を見てとても苦しくなつた。

人の悲しそうな顔を嫌になった。見たくは無いだからもうそんな人が出ないように守っていききたい。それを母さんに伝えた。

「そうなの・・・・・・・・フフッ、やっぱり私の子供ねヴェントは」

「え？」

「どういことだ？」

「母さんも管理局にいたの知ってるわよね」

「うん、確か技術部だったよね？」

「そうよ、私にはヴェントと違って魔法資質は無かったからね。やれるとしたら得意のデバイス弄りくらいだったからね。」

「そうだったのか。で、今はその時の経験を生かしてデバイスの会社の社長か……。」

「でも、なんで管理局だったの？デバイス弄るなら民間の会社もあったのに」

「それはね、お母さんは人助けがしたかったの」

「人助け？」

「そう、昔目の前でビルの爆発事故が起きてね爆発に巻き込まれて死んだ親の前で泣いている子供の姿を見たの」

母さんは淡々と語っていく。

「その子の周りは火に囲まれていてね誰も助けにいけなかったのよ。私はその泣いている子供の姿を見ているだけで心が苦しくなった。助けたいと思ったの、でも助けられない……。」

「その子はどうなったの？」

「無事助けられたわよ、管理局の救助部隊にこの時なのよ私が管理局に入ろうと思ったのは。管理局に入れば誰かを助けられるあの子の流した涙を見ないで、泣かせないですむって。変な話でしょ？」

でもね、お母さんはたとえ力が無くても自分のできることをやることで人助けができるって信じていたから管理局に入ったの」

「……………」

「ヴェント、母さんはあなたが管理局に入りたいつて言うなら止めないわ、でも……………」

母さんは俺を抱きしめた、その腕は少しだけ震えていた。

「絶対に帰ってきてね……………あなたのクイントちゃんみたい……………いなくなるなんてね」

「うん……………絶対に帰ってくるよ、母さん」

強くなる、そして守れるようになってみせるよ母さん。

それから二年、俺は取り合えず魔法学校初等部を卒業した。この二年は管理局員になるため魔法の修練、勉強などと大忙しだった。後母さんの薦めでデバイスマイスターの資格を取るための勉強をした。

この資格はデバイスの整備や製造に必要な資格なのでとっておいて

損は無いと言われた。

時の流れは早いな……毎日が濃密過ぎてマジでそう感じるよ。

でもおかげで……。

「本校の試験をクリアした諸君等を歓迎します」

おかげで俺は陸士訓練学校に合格したのだからな。

「管理局員武装局員としての心構えを持って平和と市民の安全のための力となる決意をしかと持って訓練に励んでください」

ザッ！

「はいつ！」

壇上上がっている訓練校の校長に敬礼をする。

「以上、解散！一時間後よい訓練に入る」

「はいつ！」

これから始まるんだ。

「えーと二十七号室か……っと、ここだな」

訓練校は寮制だからね相部屋は当然だ。さて、どんなやつがルームメイトなんだろうね。ちなみにルームメイトだからって訓練のパートナーというわけではないようだ。

コンコンッ

「失礼する俺は……………」

「うふふ…………私といいことしましょうよ」

「は、放せ！俺にそんな趣味はない！」

バタンッ！

……………目がおかしくなったのか？今、馬鹿の姿が見えたような。それに図体のでかいオカマが……………部屋は間違えていないな。

ガチャ

「……………」

「ヴェ、ヴェントか！た、助けてくれ！」

「あら？こつちもいい男……………」

うわぁ、こつちに気づきやがった、このオカマ。

「おい馬鹿、何でここにいる」

「ふ、ふふ…………それは永遠のライバルである俺がいらないとお前が寂しいだろうと思ってな…………わざわざ陸士学校に入学してやつ……………」

「……………」

「うるせえ」

「うぼあ！？」

「いやん、ワイルドな人」

一発殴っておいた。

「いちいち殴らないで！結構痛いんだよ！」

「本気でやってるからな」

「ヒドツ！？」

「クールなものいわん」

はあ………コイツとオカマがルームメイトなんて最悪すぎるだろ。てか、なんで合格できてるんだよコイツ。筆記テストはかなり難かったはずだぞ。

「ふっ………天才の俺様に不可能は無い！問題なぞ全てこの鉛筆サイコロでやったのだ！」

「……………」

頭が痛くなってきたよマジで。  
って、時間やばいな、後十分で集合じゃねえか。

「おい馬鹿にオカマ。準備しろ」

「え、準備って?」

「誰がオカマじゃい!」

「後十分で集合だぞ」

「ぬおっ!?!マジかよ!」

「あら?急がないとねん」

急ぎトレーニングウェアを持ち更衣室に向かう。この三人で過ごすのかよ……鬱だ。

更衣室で着替え終わり、ほとんどの奴らは訓練用デバイスを借りに行っている。俺は自作のグローブ型のデバイスを持ってきたので問題ない。

「ところでイケメンさん、あなたのペアは?」

杖型のデバイスを持ったオカマが戻ってきた。どうやら奴はミッド式か……。

「近づくなオカマ……それと俺はヴェント、ヴェント・カグラだ」

「あら?ご丁寧にも、ジョニー・グラメルよ。それと私はオカマじゃなくて身体が男なだけよ」

いや、それがオカマだろうが。

「……で、ペアの話だっただけかジョニー」

「ええ、あなたペアはどうしたの？普通はルームメイトなのに」

そのことか……。

「どうやら俺のペアは女子らしい」

「あらそうなの、珍しいわね」

そうだな、訓練校のペアは連携が円滑に進むために同性同士で編成されるんだがな。今回は人数の関係で俺が女子とペアになったようだ。教官からは後で教えられることになっている。

「ああ、まあ正式なペアが決まるまでの仮ペアだ、気にはしないさ」

「そう、まあ頑張りなさい」

「ああ」

さて、どんな奴なんだろうな。

「おおい、さっさと行こうぜヴェントー！」

「騒ぐな馬鹿が」

まったく、騒がしい奴だ。てかそのスピア型のデバイスを振り回

すな他の奴に迷惑だ。

「ムフフ、頑張りましょうねカカオちゃん」

「ち、近よんじゃね！」

「あん、いいじゃないのよ私たちペアじゃない」

「く、来るなーーーーー！」

「フフフ、お待ちになってえ~~~~」

やっぱり騒がしいなああの二人。でもカカオの奴に同情するぜシヨ  
ーと一緒になんて想像しただけでゾツとするぜ。

「さて、俺も行くか」

とりあえずまともな奴がペアであってくれよ。

「これより訓練を開始する！まずはラン&シフトだ、まずAチーム  
から！」

訓練が始まった、でも俺は今別の問題に直面していた、それは・  
・・・。

「始めまして、ギンガ・ナカジマです。よろしくお願いします」

青く長い髪の後ろにリボンのワンポイントの俺と同世代の少女、しかも性はナカジマ……間違いないあの時見た、クイントさんの娘だ。

「まさかこんなところで会うなんてな……」

「？　どうかしましたか？」

「いや、何でも無い。俺はヴェント・カグラだ。よろしく」

「はい」

手を差し出し握手する。どうやら俺のことは覚えていないようだな……まあ、母親の葬式だったから来た奴の顔なんて覚えてないか。

「ところでそのデバイスは自作ですか？」

「ん？ああ、そうだぞ」

「へえ〜凄いですね！」

「あ、ああ」

ホントにクイントさんの子だな、しっかりと人の目を見て話すところなんてまんまクイントさんだ。

「どんな機能があるんですか？見たところカートリッジシステムが搭載されてい無いようですが……」

「ああ、カートリッジシステムは着けてないな、あとはちょっと頑丈に……」

「あ、この部分は何ですか？何かの射出部分に見えるんですけど」

し、質問が止まん……！それに返答が済んでいない。

「あ、ここの材質もしかして……」

「次はCチーム、前へ！」

「お、俺たちの番だ、行くぞ！」

「あ、はい」

はあ……助かった。

「ラン&シフトだ、分かるよな？」

「はい、障害物を突破してフラッグ位置で陣形展開、ですよ」

「そうだ、そのローラーブーツ型のデバイスからして足は速いだろ  
う？先行しろ、俺がフォローする」

「分かりました！」

さて、実力はいかほどに……。

「55……セット！……ゴー！」

ドンッ!

開始の合図と共にナカジマはダッシュをかけた、用意されたコーンを安全確認しながら器用に曲がっていく。そして俺は彼女の後ろを追いかけ、そして危ういところをカバーしていく。

先にフラッグポイントに到着したナカジマは警戒態勢に入り俺を待つ、そこに俺も到着し陣形を展開する。

「よし55番、いいぞ!」

ふう……ナカジマもちゃんとできる奴みたいだな、これなら心配は無いか。

「お疲れ様です」

「ああ、お疲れさん。次は……」

「62……!!」

なんだ?

「危険行為! コンビネーション不良! 腕立て二十回だ!!」

「な、何故だぁ……!?」

「あらん? 私もかしら?」

「連帯責任だ!」

……見なかったことにしよう。

「な、なんか変な人たちですね……」

「そうだな……ほら次行くぞ、順番だ」

「あ、はい」

次は垂直飛越、相方を押し上げて塀の上に飛び乗らせ、引っ張ってもらおう奴だ。

「今度は私が下に行きます」

「ん？そうか、男の俺がやった方がいいんじゃないか？」

「私は足がありますから」

足？ああ、そうかローラーブーツじゃ持ちにくいか。

「そう、だな……じゃあ任せる」

「はい！」

「55番」

塀の前に立ち俺はナカジマが組んだ手の上に足を乗せる。

「頼む」

「いきますー！せーのっ！ー！」

って、うおっ!?

上に投げられ塀の頂上はすぐに見えたのだが力の入れすぎだ!

(チッ!)

塀を掴む事ができなかったたのでそのまま足を乗せてバランスをとりながら立つ。

「ふう……こっちだ」

「は、はい」

下のナカジマに手を伸ばすとジャンプして俺の手を掴んだ、俺はそれを引っ張り上げ一緒に下に降りた。

「55番……いいだろう。だが力を入れすぎだ、もっと抑えろ」

「りよ、了解しました……」

まあ成功したからいいかね。ナカジマは優秀だけどまだ力加減にムラがあるな、そこは直していかなきゃな。

「すみませんでした……」

「気にするな、成功はしたから十分だ」

「そう、ですか……」

ん、クイントさんみたいに活発なタイプじゃないからやりにくいな……。



「漢女、フオーイーエバーイーイー！！！」

「ヒイツ！？」

ゾンビか奴は。てか漢女ってなんだよ？

「カカオちゃん、私を殺す気！」

「いや、そのすまん」

「いいわよん」

いいのかよ。

「62番……貴様らは走って来い！校舎百週！！」

「げえ！？」

「いゃん」

はぁ……前途多難だな。

「へ、変な人たちですね……本当に」

「そうだな……」

部屋割り……変えてもらえないかな、マジで。

決心はついた。だが……奴らとは関わりたくないな、マジで。

（後書き

少し話の展開速度が早すぎたか？でもまあいいか。

訓練校時代に突入しました、これからはしばらくは訓練校編になる予定です。

オリキャラにオカマが登場しました、作者はオカマキャラが好きですので後悔はしていません！

では次回の更新で。

パンダか……何時までもつものやら。(前書き)

お久しぶりです、ISの方が落ち着いたので、ようやくこちらを上  
げれます。

それでは本編どうぞ。

パンダか……何時までもつのやら。

「でりゃあー!!」

「くっ!」

訓練校の訓練が終了した後、俺は自主練としてギンガと組み手をしていた。

「しっ!」

「キャッ!?!」

ローラーブーツでつけた加速の勢いをのせた蹴りを右拳で殴りはじき返した。ギンガはそのまま倒れ……俺はそこに……。ビュッ!ビシッ!

「あつっ!?!」

顔に寸止めの拳を放ってから、デコピンをした。

「また俺の勝ちだな」

「うう〜、ヴェント君のそれ卑怯だよ〜」

ギンガはデコを押さえながら恨めしそうに俺を睨む。

「いや、卑怯じゃないしな。魔導士同士の戦いじゃシールドやプロテクションの防御は当たり前だろ?」

「そうだけど……殴り返すのってやっぱり卑怯だよ！」

「はぁ……我侂なお姫様なこと……」。

訓練校入学から二ヶ月、俺はギンガと仮ではなく正式にペアを組むことになった。まあ、仮ペアからそのまま本ペアになるのが主流だが実際、こいつとは息を合わせやすいし気も利くので組んでよかったと思う。

それと、なんでナカジマって呼ばないのかというと本ペアになった時にギンガが。

『正式にペアになったんだから名前で呼んで』

と、言われたからだ。最初は断ったがこいつ地味に頑固だから名前前で呼ぶまで何度も、しつこいくらいに何度も言うてくるので名前前で呼ぶことにしたのだ。

「ほら、文句ばっか言ってないで立てるか？」

「うん、ありがとう」

ギンガの手を取って立ち上がらせる。

「時間も遅いしそろそろ戻るか？」

「うん、そうだね」

もう、すっかり日も暮れてまだ回りに何人かいたはずだが、それすらももういなくなって……。

「どりゃあー！ー！ー！バーニングアター！ークッ！ー！」

「甘いわよん！漢女捕縛陣！ー！」  
おとめほほくしん

「何のー！ー！」

「……まだいたか。しかも馬鹿とジョニーのコンビだし。しかし、相変わらずの馬鹿魔力だな……。それも炎熱変換のレアスキル持ちだし。ジョニーのバインドを強引に引き裂いたぞ。ジョニーもジョニーだふざけた技名だけど、あのバインド頑丈で一回捕まったら中々抜け出せないんだよな。」

「相変わらず凄いねあの二人」

「ああ、今年の中じゃ一・二を争う実力者だからな」

「ただし馬鹿だがなと付け加える。それはギンガも苦笑いして否定はしなかった。」

「あの二人も正式なペアを組んだようだ、いや、正確に言えば組まされたというべきか。魔力保有量が多く、由緒正しいベルカ騎士の一族の力カオ。あんな馬鹿がベルカ騎士の末裔だなんて信じられんが……。」

「そしてオカマだが多種用なバインドで敵を捕縛しサポート、単身の戦闘能力も優秀なジョニー。」

「はつきり言って今期の中じゃこの二人は最強の部類なのだ。だが……。」

「個性が強すぎるんだよな、あいつ等……。」

「こいつら個性が強すぎて誰も組めないのだ。馬鹿すぎて誰も制御

できない—カカオ（馬鹿）、その強烈過ぎるオカマっぷりで誰も合  
わせられないジヨニー、はつきり言ってその才能が勿体無さ過ぎる。  
結果、仮ペアの時点で組まされていたのをそのまま延長して正式  
なペアとなったのだ。

「ぬおりゃー！ー！！」

「むっふー！ーん！！」

本当に勿体無い奴らだよな、色々と……。

「まったく、あの馬鹿魔力、少しでも分けてくれないかね……」  
「」

「あはは、大丈夫だよヴェント君強いから」

「そう、言ってもな……」

俺、ヴェント・カグラの悩み、それは魔力保有量が一般管理局員  
よりも少ないのだ。若干ではあるが一般局員は平均でBランクなの  
だが俺はCランク、本来なら俺のような資質の低い奴は前線にすら  
出されないのだ。

「大丈夫だよ、まだ成長期なんだし。それにアレ付けてるんでしょ  
？」

「そうだが、あまり効果は無いしな……」

「もう、簡単に上がったらみんな苦勞はしないよ」

「それもそうだな」

ギンガが言ったアレとは今、俺が付けているリストバンドだ。これは一見ただのリストバンドに見えるが実は特殊な素材でできていて、体に魔力負荷を与える物なのだ。前に魔力が少ないことを悩んでいた俺に母さんが作ってくれたのだ、筋力負荷は体に負担がかかるが魔力負荷なら体に負担がかからない、負荷と開放を何度も繰り返すことで魔力量が増えるのだ。

正直言つと、これのおかげでランクになれたのだが最近じゃあまり効果も無くなって来ている。そろそろ限界かね。

「あ、決まった」

「ん？おお、そうだな」

話し込んでいるうちにあいつらの模擬戦が終わったようだ、結果はジョニーの勝利で一カカオ（馬鹿）はなにやら如何わしい縛り方のバインドで拘束されている。無様だな。

「じゃあ、戻ろうか」

「おう」

さて、明日も早いことだしシャワー浴びて寝るか。ジョニーと一緒にシャワー浴びると色々と危険だから早く行こう。

「ぐふふ、さあ、カカオちゃん。私といいことしましょうね」

「だ、誰か助けてえー！ー！ー！？」

俺は何も見えてないし聞いていない。

「納得いかねえーーーーー!!!」

「うっさい、黙れ」

ガスッ!

「ゲフツ!?!」

ココアがうるさかったのでとりあえずボディーブローを打ち込んでおいた、わりと本気で。

「もう、ヴェント君。暴力はだめだよ」

「むう………」

魔法学校時代からの条件反射だからな、つい殴ってしまっ。

「お、おお、さすがギンガちゃん……姿もそうだが心まで女神のようα………」

「ココア君もうるさいよ、もうちょっと周りの迷惑を考えなよ」

「・・・・・・・・・・チクシヨウ」

「あらん、どうしたのカカオちゃん？」

俺たちが騒いでいるとジヨニーがやってきた。

「あ、ジヨニー君」

「よう、ジヨニー」

「ハイ、ギンガちゃん。で、カカオちゃんはどうしたの？」

今じゃ普通に挨拶しているが、最初のうちは怯えていたからなギンガの奴。まあオカマなのを除けば普通にいい奴なんだよなジヨニーって、やっぱり色々と勿体無い奴だよ。

「それが・・・・・・・・」

「なんで俺たちの順位があんなに低いんだよ！」

「今回の訓練成果発表が気に入らないんだとさ」

先ほどこれまでの成績の発表されたのだ、教官判断の正式なものではないが参考になるのだ。俺たちは総合五位、結構いい所にこれた。で、カカオたちの順位は。

「だって最下位だぞ！納得できるか！！」

最下位だ、まあそりゃそうだよなアレだけ訓練をかき回しておきながら上にいられると思うなよ。

「そうよね、でもしょうがないわ力カオちゃん、実際私たちまともに訓練できてないんだから」

「そんなの知るか！俺たちが一番強いんだぞ、なのに最下位なんて納得できねえよ！！」

こいつ等が一番強いそれは本当のことだ。この前のペア同士のチーム戦であいつらは全戦全勝、今回の成績順位のトップの奴らに全勝したのだ。それも圧倒的な、俺とギンガも負けた……悔しいことにな。

「でも、ただ強ければいいってものじゃないわ、管理局は組織なの。規律を守れなければ意味が無いわ」

「でも実際に強い奴が上に行ってるじゃねえか！なのに何で……」

「落ち着け馬鹿が」

ドスッ！

「グフウ」！？

ボディーをまた一発殴っておいた。

「な、何しやがるヴェント！」

「だから落ち着きやがれ。ジョニーに文句言っただろう、成績を付けたのは教官だ文句があるなら言っただけ来い」

「おつっ！言ってきてやるぜ」

立ち上がり教官の元に向かっていった一カカオ（馬鹿）、これでよし。

「い、行っちゃったね……」

「あれでいいの、ヴェントちゃん？」

「いいんだよ、俺たちが言ってもあいつは理解しねえよ。だから直接、教える立場の教官に言ってもらったほうがいい」

教官の言うことはちゃんと聞くからなあいつは。

「それに、このことが理解できないなら力カオは管理局に必要な無い。どこか紛争が起きている次元世界で傭兵でもやっていたらいい」

己の力を誇示するだけなら管理局に入るなっただことだ。

「ヴェント君……」

「ヴェントちゃん、それは言いすぎよ」

「確かに言いすぎだな……だが、あいつはスタンドプレイが過ぎている。もし同じ部隊に所属したとき俺はあいつに背中を預けられない。それはお前も同じじゃないかジヨニー、ギンガ」

「……」

黙る二人。否定はしないのは心の中じゃ俺と同じ考えなんだろう。

「まあ、この話はここまでだ。これからはあいつ次第だ」

「そうよねん……カカオちゃんを信じるしかないわね」

「そうだね」

「あ、ところでヴェントちゃんにギンガちゃん、明後日からの休み何か予定ある？」

ん？休み？

「休みって何だ？」

「何だ、って……ヴェント君、明後日から訓練校のシステムチェックで三日間お休みになるんだよ、忘れたの？」

「ん？ああ、そうか明後日から休みだったか、すっかり忘れてたな」

訓練に必死で忘れてたぜ。

「もう、ヴェント君たら……で、ジョニー君どうしたのいきなり休みの予定なんて聞いてきて」

「そうだぞ、まさかストーカーするためじゃないよな……」

だったら言わねえぞ。

「そうじゃないわよ！お休みの日、一緒に買い物行かない？」

「「買い物？」」

ギンガと声をそろえて言ってしまった。

「そう、実は二人にお願いがあるのよ」

「お願いって何？」

「女性物の服を選べって言うならお断りだぞ」

ジヨニーと一緒に女物の服屋に入った日には俺も変態の烙印を押されるだろう。

「違うわよ、実はデバイスの部品を見に行つてほしいのよ」

「デバイスの部品？何でだ」

「実は私の魔法、訓練用のデバイスじゃ処理し切れなくてオーバーロードしちゃうのよ。だから教官に自作のデバイスか市販されているものを買えって言われてね……。でも市販されている奴だとどうしても高くなるから……」

「だから私たちに？」

「そうなのよ！私、デバイスの部品のことなんて全然分からないし……だから自作デバイス持ちのあなた達に教えてほしいのよ」

ふむ、そういうことか……。確かに訓練中何度かジヨニーのデバイスの調子が悪そうだったからな……。原因は処理し切れ

なかったのか。まあ訓練用だからな、ジョニーのような一点特化型の魔法じゃそうなるか。

こいつには色々世話になってるし……。

「いいぞ、俺でよければ教えてやるよ」

「私も。でもそこまで期待しないでね」

「ホント！ありがとう二人とも！それじゃあ何時にする？私はいつでもいいわよん」

「ん」と、私一回家に帰りたいしな……スバルの様子も見に行かないと。それじゃあ、二日目なんてどう？ヴェント君は？」

「ん、そうだな……」

俺も家に帰りたいしな、母さんにも会わないと……それだったら二日目がちょうどいいか。

「俺もそれでいいぞ」

「じゃあ、決定ねん！よろしく頼むわよん！」

「ああ」

「うん」

さて、じゃあ店調べておかないとな……ってあれは。

「……………」

「よう、どうだった馬鹿」

「ぷっ……だ、大丈夫、か、カカオ君……」

「あらん、イケメンなのに勿体無い。でも可愛くなつたわねん……じゅるり」

教官に文句を言って帰ってきたカカオの顔は見るも無残な両目に青タンをつけた……第97管理外世界の人気動物、パンダになっていた。

「……笑いたければ笑え」

「じゃあ、大笑いしてやろうか？」

「生意気言つてすみません！だから笑わないで！」

自業自得だ馬鹿が。ちなみにギンガは隅で必死に笑いを堪えていた。

「あつ、遊びに行くなら俺も行くぜ！」

聞いてたのかよコイツ。どんだけの地獄耳だよ。

ちなみに翌日、パンダのまま訓練に出た一カカオ（馬鹿）は全員に笑われるという大恥を掻いたのだった。

パンダか……何時までもつのやら。(後書き)

パンダ、見に行ったのですけど人並みに揉まれて全く見れません  
した……チクショウ!

次回は買い物編?です。それでは次回の更新で

掘り出し物とは一期一会なのだよ、分かるかね？（前書き）

書きあげましたので投稿します、今回は原作でもお馴染みのあの子を登場させました。

では本編どうぞ！

掘り出し物とは一期一会なのだよ、分かるかね？

「遅いな……時間間違えたか？」

休日の二日目、俺は事前に決めていた待ち合わせ場所の駅前で待ちぼうけしていた。

「間違つてないよな……全員遅刻か」

「あら、早いわねんヴェントちゃん」

「遅いじゃねえかジヨニー、遅刻だぞ」

待ち合わせ時間から二十分でようやく一人やってきた。

「え？何言ってるのよ、待ち合わせの時間変更になったじゃないの」

「は？そんなの知らんぞ」

聞いてもいなし。どういうことだ？

「あら？おかしいわね、カカオちゃんが連絡するってことになってたはずなんだけど……」

ああ、あいつのせいか……！

「やつほ……！俺様参じ……」

走ってきた奴に俺は思いっきりリアットを喰らわせた。もちろ

ん手加減なしだ。

「ゲフツ!? な、何をする……ヴェント」

「何じゃねえよ馬鹿が、貴様、俺に時間変更の連絡はどうした」

「……………あ

忘れてやがったなコイツ。

「あ、あはは、ドンマイ!」

ドスドス!

「目があ……………!?」

知るか……………。

「後はギンガちゃんだけね」

「そうだな」

「目が……………見えん……………どどどだヴェント」

無視だ無視、しばらくそのままでいろ。

「あ、来たようねん」

「そつみただな……………って、ん?」

駅のホームから見慣れたりボンの女の子が見えた、ギンガだ。だがその隣には……………。

「誰かしら、あの子？」

「……………妹じゃないか」

ショートカットの小さな女の子、あれはクイントさんのもう一人の娘、葬式の時に見た泣いていたあの子だ。でも何でいるんだ……………。

「ごめんなさい、遅れちゃった？」

「いいや、大丈夫だ」

「ええ、時間ピッタリよ。それに女の子は準備に時間がかかるからね」

「そう、よかった……………あれ？カカオ君は何をしてるの？」

「さあな、目が退化したんじゃないか。それよりもその子は……………」

俺たちが目線を下に向けると、女の子はギンガの後ろに隠れてしまった。ジヨニーが怖いのか？

「あ、うん私の妹で、どうしても着いてくって……………ほら、スバル。挨拶しなさい」

「う、うん……………」

ギンガが背中を押して前に出させた。この子もクイントさんに似ているな……。

「す、スバル・ナカジマです。よろしくお願いします……」

うん、ちゃんと挨拶もできるみたいだな。

「はい初めまして、私はジョニー・クラウンよ。ジョニーって呼んで頂戴、スバルちゃん」

ジョニーは目線をスバルちゃんに合わせるのだが元が不気味なせいかまたギンガの後ろに引っ込んでしまった。

「こ、こら、スバル！失礼でしょう」

「うっっ」

あらら、完全に怯えちゃってるよこの子。どうするジョニー。てか、ジョニーの姓ってクラウンだったのか初めて知ったな。

「あらあら、驚かしちゃったわね……とりあえずコレどうぞ」

「あ、アメだ！」

ジョニーはポケットの中からアメ玉を取り出してスバルちゃんにあげた。アメに釣られてスバルちゃんもギンガの後ろから出てきてアメを受け取った。餌付けだなコレ。

しかしスバルちゃんもスバルちゃんだ、お菓子が好きなのかもし

れないけど怪しい奴にお菓子をもらって心を許しちゃだめだろっ。

「はい、よろしくね」

「うん」

まあ、ジョニーだから大丈夫か。次は俺か……。

「初めましてスバルちゃん。俺はヴェント・カグラ、よろしくな」

ジョニーがやったように目線を合わせて手を前に差し出す。でも、スバルちゃんは……。

「じーーーーー」

「な、何かな？」

「じーーーーー」

もしかしてこの子、俺のこと覚えているのか？

「あ、ギン姉と一緒に写ってた人だ！」

「ん？」

「ちょ、す、スバル！」

写ってた？どっいっことだ？

「あらん、どっいっことスバルちゃん？」

「えっとね、前、ギン姉からのメールの写真にね、一緒に写ったの」

「へえ、そうなの」

写真って……ああ、確か正式にペアを組んだ時に撮ったけな。ギンガの奴あれ送ったのかよ。でも、ジョニーなんてお前ニヤついてるんだよ、はっきり言って気持ち悪いぞ。

「べ、別に深い意味は無いからね！た、ただの連絡の為に……」

「ふうん……まあ、そういうことにしてあげましょうか」

「じよ、ジョニー君！」

「？」

何の話をしているんだこいつらは……。

「そ、それよりも早く行きましょう！時間は有限なんだから」

「ん？そうだな」

「そうよねん、行きましょうか」

「ああ、じゃあまず俺のデバイスの部品を買ったショップに行くか。ここから近いしな」

「じゃあ、そうしましょ。お願いねヴェントちゃん」

「ああ」

あそこだったらいい掘り出し物がありそうだしな。ジョニーに合う部品も見つかるだろ。

「こつちだ」

「ええ、さあ行くわよスバル」

「うん！」

「さあ、気合入れていくわよゴルア！」

ジョニー、いきなり野太い声に変えるなよな……………。

「ま、待ってくれ皆……………目が、目が見えないんだ」

あ、馬鹿のことすっかり忘れてた。

「む……………」

「すまん、あんたが言った部品は今は扱ってないな」

「そうですか」

「ここにも無いか……。」

「ココも駄目みたいね……。」

「ああ、もう製造してないのかしら……。」

そんなこと無いはずんだけどな……。。ジョニーのデバイスの部品を求めているんな店に入ったのだが最後の一つがどうしても見つからない。

「まだなのかよ、もう飽きちまったぜ」

「たくつ……。」

「カカオ君そんなこと言わないの、今日はジョニー君の為に着たんだから」

「でもよ、コレだけ店を回ったのに見つからないならもう無いんじゃないかねえのか？」

「……その可能性もあるな……型は古くマイナーなパーツだからな、市場に出回ってないのかもしれないな。」

「そうよね……ねえヴェントちゃん、代用できるパーツは無いの？」

「あるにはあるが……高いぞ」

「どの位？」

「・・・・・・・・・・ぐらいだ」

ジョニーの耳元で小声で言うとジョニーは固まってしまった。

「マジで・・・・・・・・」

「マジだ」

代用できるパーツの値段はハッキリといえば安いデバイスなら簡単に買える値段だ。そのくらいの高級パーツなのだ。

「それは無理ね・・・・・・・・」

「だろ」

俺たちはまだ正式な局員じゃないから給料は少ないからな、なるべく少ない出費でやらないといけない。

「そ、そんなに凄い値段なの？」

「新品のデバイスを買ったほうがマシって値段だ」

「うわぁ・・・・・・・・」

後一つなただけだな・・・・・・・・。

「ギン姉、お腹空いたよ」

「え？あ、もうこんな時間・・・・・・・・」

「そうだな、いったん中止して飯にするか、それでいいかジョニー？」

俺も腹減ってきたしちょうどいいか。

「いいわよん、私もお腹ぺこぺこ」

「俺もだ！」

お前には聞いていないわカカオ（馬鹿）。

「じゃあ行くか」

さて、バイキングの店を探すか。じゃなきゃこの姉妹は……………

「おかわり！」

「わ、私も……………」

「……は、はは……………」

ど、どんだけ食うんだこの姉妹は……………。訓練校でギンガとよく行動することになってから分かったことなのだがコイツは、いやこいつの家系はとにかく食うんだ。それもおかしい位に。

「ヴえ、ヴェントちゃん、会計大丈夫？」

「大丈夫だ、そのためにバイキングの店を探したんだ問題ない」

「ギンガちゃんは知ってたけど、スバルちゃんまで食うとは思わなかったぜ」

料理を取りに行った二人に聞こえないように小声で話す。男三人。

「でも、さすがにヤバくないかしら、店員さんの目が怖いんだけど」  
「気にするな、それに限界まできたら店員が止めに来るだろう」

「でも、なんであんなに食えるんだ？俺もよく食べるほうだけどあそこまでは食えねえぞ……」

知るか、ナカジマ家の胃袋には虚数空間でもあるんじゃないか。

「ただいまー！」

「ただいま。三人とももういいの？食べ足りてないんじゃないの？」

「……気にしないでいい（わよ）」「……」

「？ そう」

そういい皿に高く盛られた料理を食べ始めるギンガ、見てるだけで腹いっぱいになるつーの。スバルちゃんとギンガの皿の料理はみるみるうちに減っていき……。

「ふう、」馳走様！」

「私も」

ようやく終わったか……後ろにいた店員も安堵の息を吐いているな。

「じゃあ、デザート！」

「そうねスバル、アイスがあったから行きましょう」

「」「」「え？」「」「」

まだいけるのか！？思わず声が合っちゃまったじゃねえか、店員も。

「わーい、アイスだあー」

こいつらは化け物か……………。

「俺、初めてだぞ。バイキングの店で帰ってくださいって言われたの」

「だ、だからもう言わないでよ！恥ずかしいんだから……………」

「それはこっちの台詞だ」

あの後すぐに俺たちの席に店長が従業員数人を引き連れて頭を下げられた。このままじゃ店が潰れるから帰ってくれと言われてな。おかげで食っていない俺たちも公衆面前の前で大恥を掻く羽目になった。

「そ、それは謝るけど………」

「はぁ……まあこれでお前はあの店のブラックリストに載ったわけだ、もう行けないな」

「う、うそっ！？そんな～あのお店の料理美味しかったからまた来ようと思ってたのに………」

「諦める、あつちも商売なんだ。お前とスバルちゃんがしょっちゅう来たらすぐに閉店に追い込まれるぞ」

店長自らが頭を下げたんだからな、相当凄かったんだろう、金額的に。

「まあ、次から気をつけて………」

「はぁ～これで三件目が」

「何度もやってるのかよ！」

常習犯かコイツは、てか学習しろよ！

「だって食べ放題って書いてあるから………」

「それにしても限度ってものがあるだろう……たく」

こいつそのうち街全体の店のブラックリストに載るんじゃないのか心配になってきたぜ。

「あら、ねえヴェントちゃん。あそこのお店ってデバイスのお店じゃないの？」

「なんだって」

大通りから外れた小道の奥のほうに小さな看板が見えた、そこにはちゃんとデバイスのシヨップと書かれていた。

「本当だな、こんなところにあつたなんて知らなかつたぜ」

「でも、あんなボロイところにねえんじゃねえのか？」

「まあ行ってみましょうよ、もしかしたらあるかもしれないし」

「そうだな、行ってみるか」

案内掘り出し物があるかもしれないしな。騙されたと思っ  
てみるか。

〈三分後〉

「毎度あり〜」

「まさか本当にあるとは思わなかった」

「私も……………」

「あるところにはあるのね」

「しかもまだ大量にあったぞ……………」

「いっぱい」

これまで行った店はなんだったんだ……………しかもあの店かなり安かったぞ。今まで買ってきたパーツもあったし。隠れた名店ってこういうところのなんだろうな。

「でも、これで全部揃ったな」

「よかったわねジョニー君」

「ええ、これで私専用のデバイスが作れるわん！」

「時間も余ったな、どうする？」

俺はこのまま解散でもいいがこいつらはどうせ……………。

「じゃあ、このまま遊びに行きましょう！」

「賛成だ！」

「さんせー！」

遊びにか・・・まあそれもいいか。

「ギンガは？」

「私も賛成、洋服とかも見たいし」

「そうか、じゃあ、どこから行く・・・っ!？」

景色が変わった・・・色は灰色になり、賑わっていた大通りも人数が一気に減った・・・これはまさか・・・。

「こ、これって広域結界!？」

「な、なんでこんなものが突然・・・？」

「どうなってるんだよ・・・」

突然の結界に戸惑う俺たち、こんな街中で結界が展開されるなんて異常なことだぞ、あつたとしても事前に管理局が退避させる。だとしたら考えられることは・・・!!

「お前等、この先にあるデバイスショップに急ぐぞ・・・」

「え？何で・・・」

「俺の予想が正しければこれからやばいことが起きるってことだ・・・」

「管理局がやらなかったら誰がやった？他に考えられることは・・・」

「事件が起きるぞ……！」

ドオーーーーーンッ!!!

遠くで爆発が起きた。そこからは茶色の光、魔力光が見える。火が上がる建物、人の呻き声も聞こえてくる。

これで確実だ……この結界は犯罪者が起こしたものだ。

「げへへ……皆殺しだーーーーー!!!」

立ち上がる火を掻き分け出てきた中年の男、目の焦点は合ってなく口からは涎が垂れている。男はその目をこちらに向けて叫んだのだった。

そして俺たちの休日には地獄へと変貌したのだった。

掘り出し物とは一期一会なのだよ、分かるかね？（後書き）

急展開にしすぎたかなと少し後悔中。

今回の話ではSttSのもう一人の主人公？のスバルを登場させました、これで原作突入時に話が書きやすk・・・ゲフンゲフン、なんでもないです。

今回はこの小説初となるちゃんとしたバトルシーンとなります。ちゃんと書けるか心配ですが、頑張ります！

では次回の更新で

男にはやらなければいけないときがあるのだよ。(前書き)

今回もooooです……すみません。

本編を……。

男にはやらなければいけないときがあるのだよ。

「ヒヤハハハ！皆殺しだーーーーー！！！」

男はまた魔方陣を展開して今度はビルに向けて砲撃を放った、するとビルは簡単に破壊され崩れ落ちたのだった。

「来ちまったか……ギンガ、局に連絡だ！」

「そ、それが通じないの、通信が妨害されていて……」

通信妨害も兼ねてるのかよこの結界は！

「とりあえず市民の安全の確保だ！ジョニー、カカオ手伝え！」

「え、ええ……！」

「お、おう！」

「ヴェント君、私は」

「お前は避難誘導だ！近くに避難用のシェルターがあるはずだそこに行け。それとスバルちゃんをしっかりと守っておけ」

「う、うん！」

ここはまだあいつからの死角だ今のうちに市民を避難させないと……！幸いあの犯罪者は正気を保っていないのか何も無いところに向かって叫び続けているし見えていない。早く避難させないと。

「た、助けっ……!?!」

「落ち着いてください、自分たちは管理局の者です」

「か、管理局の……」

「今から安全な場所まで誘導します、だから落ち着いて行動してください」

「あ、ああ」

よしっ、いったんは落ち着いたか……。

「では、あの女の子に着いていってください、安全な場所まで誘導してくれます」

「わ、分かった」

男性は立ち上がりおぼつかない足取りでギンガの方へと向かっていった。ジョニーとカカオも順調だな……。あいつがこちらに気づかないうちに何とかしないと……。

「あの子が避難用シエルターに案内してくれます」

「は、はい」

座り込んでしまった女性を立ち上げらせギンガの方に向かうのを

見送る。これで、最後か……人数が少なくてよかった。で、あいつは……。

「ゲヒヤヒヤヒヤ!」

ドオンッ!

っ!?……見つかっちまったか。

「みいゝつけた!」

くっ!?

「ヴェント君!」

「ギンガは早く行け!市民の安全が一番だ!!」

「で、でも……」

早く行け!

「っ!……分かった、気をつけてね!」

「おう」

……行ったか。

「ぐびゃ、ぐびゃひやはは!」

……コイツ、薬物でも服用してるのか、精神状態が異様に不安定だ……

「ひゃはあっくくくくく!!」

ドオンッ!!

「アヒヤヒヤッ!粉微塵だあゝ・・・あっ?」

「危なかった・・・」

あの男が撃った砲撃を何とか避けて瓦礫の影に隠れた俺たち、奴は俺の死体が見たら無いのに気づいて辺りを探している。

「で、カッコつけたのはいいけど、どうするのヴェントちゃん、私たちも避難する?」

「無理だろうな。今避難したらこいつは避難所に行く可能性が高い・・・」

先ほどのビルを破壊した砲撃からして避難所のシェルターなんて簡単に潰せてしまうはずだ。

「だ、だったらどうすんだよ・・・?」

この結界に気づいて近くの部隊がもう動いているはずだ、だからそれまで・・・。

「俺たちが奴を食い止める」

「む、無茶よ!あなたもさっきの砲撃を見たでしょ!」

「そ、そうだぜあれはどうみてもAランク以上だ！そんなの俺たちが食い止めるなんて無理だ！」

確かに、あの砲撃はAランク以上の威力だったが。

「だがここで下がれば市民に危険が及ぶ」

「で、でも……」

「それにすぐに近くの部隊から武装隊が来るはずだ、俺たちはそれまでにあいつの注意を引き付ければいいだけだ」

局の部隊が来ればあの男を倒せることができるはずだ。

「簡単に言ってくれるわね……」

「ああ、そうだな……でも今できるのは俺たちだけだ」

「……」

「別にお前たちは避難してもいいぞ、だが俺はやる」

このままあいつを野放しにしたら被害が出る、そして悲しむ人が多く出るだろう、俺は悲しむ人たちを出さないために管理局に入ったんだ、だからこんなところで逃げてたまるか！

「しょうがないわね……付き合っただけ」

「俺も付き合っただけ！ここは最強の俺様がいたほうがいいだろ」

「ジョニー、カカオ……………いいんだな」

こいつらも覚悟したか……………だがもう一度聞いておく。コレは死ぬかもしれないからな。

「ええ（ああ）」

「サンキュ……………」

助かるぜ、正直言つと足が震えてるんだよな……………でもこいつらがいたら大丈夫だ。

「じゃあまずは、後ろのほうにデバイスショップからデバイスを取つて来い……………デバイスが無ければ戦えないだろう」

「そうね……………でも取つてこれる暇なんて……………」

デバイスショップまでの道程は確実にあいつの視界に入ってしまった。だから……………。

「俺が奴の気を引いてる間に取りに行つて来い」

「な、何言ってるの！？危ないわよ！」

「そつだぞ！それにお前だってデバイスねえじゃん……………」

「俺のはここにある」

懐から金属製のカードを取り出し見せる。

「それって……」

「持ち運びが面倒だったんでな、携帯できるようにしたんだよ。まさかこんなところで役立つとはな」

「で、でもお前一人でなんて……」

「コレしか手が無いんだ、やるしかないだろ。それにお前等が早く戻ってくればいいことだ」

「……」

「どこだぁー……！！！！」

ドンッドンッ！

チツ、瓦礫を吹き飛ばし始めたか。

「時間も無い、行くぞ」

「分かったわ……行くわよカカオちゃん」

「ああ！ヴェント俺たちが来るまでくたばんじゃねえぞ」

「おっ」

目を閉じて深呼吸をし気持ちを落ち着ける。……よしよしっ！

「Set……」

カードが光り俺の手を包み込んだ。光が納まると俺のデバイスが両腕に装備した状態になった。

「そこかあ~~~~~!!!」

光に気づいた奴は、魔力を収束し始めた。

「いけえっ!!」

俺の合図とともに二人は瓦礫から出て駆け出した！

「死ねえー！！！！」

奴のデバイスは二人へと向けられた。させねえよ！！

《Assault Step(アサルト・ステップ)》

デバイスから電子音声が響くと俺の足が魔力によって強化させた。そして地面を蹴り奴に突っ込んだ！！

「ひゃ？」

「喰らいやがれ！！」

《Hard Beat(ハード・ビート)》

「グヒャッア!?!」

魔法で拳を強化して俺は奴の顔を思いっきり殴った。急接近した俺に気づかなかつた奴は俺の拳をモロに受けて吹き飛んだ。収束し

ていた魔力は霧散し砲撃の心配は無くなった。

これで倒したとは思えない……警戒は解いてはいけない。

「貴様ぁー……！！！」

やっぱりか……。

「殺すクロスころす殺すころす殺すクロス！！！」

奴は怒り狂いデバイスを振り回す、周りには茶色の魔力スフィアが形成されていく数は約三十……威力は未知数だ。どうする！

「ア……！！！」

奴の奇声が合図となり三十発のスフィアが一斉に放たれた。

「くっ!?!」

防ぐのは無理だ、だったら……！

《Shell Gauntlets (シェル・ガントレット)》

「はぁ……！！！」

弾くのみ……！

俺の前腕は魔力を纏い、その腕で迫り来るスフィアを弾き飛ばした。

「あ?」



「どっせい!!」

炎を纏わせた大剣が奴を吹き飛ばした。ようやく来たか……

「遅いぞ二人とも……てつきり逃げたのかと思ったぞ」

「へっ、俺様がそんなことするわけ無いだろう!」

「笑えない冗談ね、ヴェントちゃん。私のことそんな女だと思つたの?心外だわん」

俺の前に立つジョニーとカカオ、二人の手にはデバイスシヨップから拝借してきただろうデバイスが握られていた。

ジョニーには大きな杖方のストレージデバイス、カカオは両刃の大剣型のアームデバイスが握られている。

「随分といいのを借りてきたな」

「ええ、一番高そうなのを借りてきたわ。作るならこんなのがいいわねん」

「へ、あそこのシヨップの奥に隠してあつたのを借りてきたぜ、これはまさに俺様のためにあるようなデバイスだぜ!」

確かに二人の戦闘スタイルに合ってるかもな。でもこれでだいぶ楽になる。

「それよりもやったのか?」

「さあ、でもいいのが入ったから、もしかしたら・・・っ！散開！  
！」

ジヨニーの怒号に反応しその場から飛び退くと茶色の閃光が通り過ぎた・・・やっぱりまだダメか。

「貴様らあああああああ！！！！」

今度こそマジでキレたっぽいな・・・。

「気、引き締めるよ」

「わかってるわ」

「おう！」

武装隊が来るまでなんとか持ちこたえる！

「行くぞっ！！」

「「「おお！！！！」

ドオンッ！！！！

「くっ！？……ジョニー！」

「おっつ！チエーンバインド！！」

「ガアア！！」

ジョニーのバインドで押さえている間に次の手だ！！

「カカオ！！」

「おっよ！どりゃあ！！」

「ガアッ！！」

ギンツ！！

カカオのデバイスと奴のシールドがぶつかり合い火花を散らす。

「でりゃーーーー！！」

「ぐおおおおお！！」

「く、うわっ！？」

攻撃はシールドを破れず弾かれ、奴はバインドを引きちぎりカカオをデバイスで殴り飛ばした。

「せいっ！！」

殴り飛ばされたカカオと入れ替わり俺が奴に殴りかかるがまたもシールドに攻撃を弾かれ後退した。

「ハアハア……バインドが全然効かないわね」

「それよりも攻撃が全然通らない……」

「堅すぎるぜアイツ……!」

先ほどから三人での連携で戦っているのだが奴に攻撃が全く通らない。前に当てたのは完全な不意打ちだったから通ったが警戒されて防御が厳重になりやがった。

俺たちの中で最も攻撃力がある力カオの一撃でさえ防がれる始末だ。

「ゼエゼエ……武装隊は、まだなのかよ!」

「時間……どれだけ経ったの……?」

「ハアハア……二十分だそろそろ来てもいい頃なんだがな」

結界がかなり頑丈なのか?それとも武装隊がまだ動いてない……とは考えたくは無いが、このままじゃ俺たちの体力もヤバイ。

「ゲヒヒ、ゲヒヤハハハ……!」

だがそれは奴もだ、あれだけ魔力を使ったんだどんなに魔力が多かるうともそろそろ尽きてもいいはずなんだが。

「ヒヤハアツ……!」

「っ!?!? 散開!」

ドンッ！

なんで一向に尽きる気配が無いんだよ！

「ジョニー！もう一回だ！！」

「オラアッ！！」

「アアアアアアーーーー！！！！」

ジョニーのバインドで何度も縛られ奴は怒り狂う。

「カカオッ！！」

「おっつ！！」

今度は同時だ、喰らいやがれっ！！

《Hard Beat》

「でえりやあっ！！！！」

ガンッ！！ギンッ！！

「ガアアアアアア！！！！」

やっぱり堅いな……！！でもこのまま押し切る！！

「もう一発っ！！！！」

《Hard Beats!!》

左の拳にも魔力を込めて両腕で何度も殴るとシールドにヒビが入った。これを逃がすわけにはいかない！渾身の力を右手に込めて振り切った。

「おらぁっ!!」

「グベエ!？」

シールドは破れ、俺の拳は奴の顔へと吸い込まれた。

「どっ……せいつ!!」

「ガァァァァァ!？」

ドオンッ!

さらに追撃としてカカオの一閃が奴の腹を捕らえ吹き飛ばした。そして瓦礫が落ちてきて奴は埋もれた、立ち上がる様子も無く静寂だけが過ぎていく……。

「ハアハア……」

「ゼエゼエ……」

もう限界だ、先ほどの攻撃で魔力と体力を殆ど使い果たした。これ以上は無理だ……。

「……や、やったの?」

「わからん……だが、今は決まった、はずだ……」

「俺様の全力だ……立てるわけが<sup>トコ</sup>ン……嘘だろ」

マジかよ……まだ立てんのかよあいつは……。

「ゲフツ・ガフツ……！」

と、吐血……！どこか身体を壊したのか。

「これ以上は止める！死ぬぞ……！」

「ガアアアア……！」

ドオンツ……！

「くっ！？」

聞く耳なしかよ！奴は問答無用に砲撃とスフィアを放った。

「グルアアアア……！」

奴は雄たけびを上げた後、無差別に砲撃を放ち始めた。避けた際にスフィアが顔を掠った場所から血が流れる。あいつ、遂に非殺傷設定を切りやがった！

「完全に正気を無くしたようね」

「でも奴は手負いだ！俺が決めてやる……！」

デバイスを構え直したカカオが奴へと走り出してしまった。

「カカオ、一人で突っ走るな!!」

「カカオちゃんダメよ!」

「おおおおお!!」

カカオは俺たちの言葉も聞かず突っ込んでいく。すると俺の視界に小さな魔方阵が見えた、あれは・・・まさか!?

「やめるカカオ! 罠だ」

「なっ!?!」

カカオの足をバインドが縛り動きが止まってしまった。設置型のバインド、あいつそんなことできるほどの理性があったのかよ!?

「ゲヒッ!」

収束砲、ヤバイ!

「逃げるカカオ!」

「だ、ダメだ、バインドが解けねえ!!」

くそっ、カカオの処理能力じゃ間に合わない、だったら奴を・・・!

「ジヨニー!」



破られた。そして閃光が二人を飲み込んだのだった。

男にはやらなければいけないときがあるのだよ。(後書き)

書いていていつも思うことは文才が欲しい……です。

今回初戦闘シーンなのですが全然上手くないですよ、すみません。

今回の更新は少し遅くなると思います。では

無茶と無謀は違っているのを理解したよ、この身で……。(前書き)

だいぶ難産でした……どう書けばいいのか悩み、何度も書き直しました……。

とりあえず本編をどうぞ。

無茶と無謀は違つてのを理解したよ、この身で……。

「ヒヤハハハハハハ！死んだ！二人死んだ、ヒヤハハハハハハ！  
」

閃光が過ぎ去った後の場には何も残っておらず、焼け跡だけとなつていた。あの二人の姿もない……。

「き、貴様……！！」

何笑つてやがるんだクソ野郎が！！

俺は残り少ない魔力を拳に込め、やつに殴り掛かったが。

ギインッ！

「くっ……！！」

奴の頑強なシールドに阻まれ攻撃は通らなかった……だが  
奴も。

「ゲホオ……ギャハ、ハッ……カフッ！」

口から血を吐き出しながらも笑っている。でもそんなことは頭の中に入らない、俺の思考は奴への怒りでいっぱいだった。

「おおおおお……！！」

『ヴえ、ヴェント……』

っ！？今の念話まさか、カカオか！

『カカオ生きているのか!』

『あ、ああ……ジヨニーも生きてる。今そこから離れたビルの裏だ』

よかった……本当によかった……。でもどうやってあの砲撃を……。

『ジヨニーが砲撃を防いでくれているうちに何とかバインドが解けたんだ、その間に……』

そうか、だから無事だったのか……。

『とりあえずよかった……。怪我は、身体は無事なのか』

『俺は大丈夫だけど、ジヨニーがちょっとヤバイ、頭を打って血流してんだ……。意識もない』

っ！早く医者に見せないとヤバイな……。打ち所しだいでは死んでしまつかもしれない……。

『……カカオ、お前はジヨニーを連れてシエルターに行け。幸い奴はまだお前たちが生きていることに気づいていない。今なら行けるはずだ』

ジヨニーはとりあえず安静にしなければいけない……。応急処置もだ、でもこんな不衛生で危険なでは場所では無理だ、シエルターに行かせるしかない。

『でも……お前一人でどうするつもりなんだよ!』

『やるしかないだろ、それにお前、怪我隠してるだろ』

『ぐ……』

やっぱりか、なんか痛みを耐えている感じがしたから言ってみたんだが本当だったな。

『でもお前だって魔力が……』

『ああ、だが満足に動けるのは俺だけだ、何回避に専念すれば時間は稼げる。だから早く行け』

奴の攻撃は単調になっている、できないことはない。

『……わかった、死ぬなよヴェント』

『ああ』

……さて、とりあえずあいつらがシエルターに着くまでバレねえようにしなくちゃ。このままだと流れ弾に当たりそうだし。

「ゲヒッ……」

「さあ、こつちだクソ野郎殺せるもんならやってみな!」

「ガァァァァァ!」

よし、かかった。しかしこうなるとただの獣だな。まあ、こっちはその方がやりやすいんだがな。

「さあ、鬼ごっこだ……ついて来いよ！」

＼side ???？＼

『航空魔導師、本局01現在位置を教えてください』

「こちら本局01、目的地まであと約十分の距離です」

『急いでください、現在地上部隊が結界の破壊を試みっていますができそつにもありません』

「了解！……急ぐよ」

『Yes, sir』

急がないと……！！

＼side vent＼

「ハアハア……ッ！」

すぐ近くの瓦礫にスフィアが直撃し粉々になる。だが足を止める

な、止めた瞬間死ぬぞ！そう自分に言い聞かせて身体を強引に動かす。

「ガアアアア！！！」

(ちゃんとしてきてるな……いいぞ、そのままついて来い！)

「ガアアアアツ！！！」

「おっと！！！」

あぶねえ……コイツ段々と攻撃の精度が上がってきてやがる、いや……俺が遅くなってるのか。

あいつらは大丈夫なのか……そろそろシエルターに着いていていいはずなんだが……。

『ヴェント、生きてるか！』

きたか……。

『ああ、生きてるぞ』

『よかった、無事か……』

『そこまで大丈夫でもないがな』

つわ、あぶねっ！俺はマルチタスクを駆使しながら回避と念話の両方を同時にやる。

『で、ジヨニーの容態はどうだ？』

頭部を打ったんだ、何も無ければいいんだが……。

『あ、ああ避難所に医者が出たから診てもらったけど、命に別状は無いみたいだ』

そうか、よかった……。

『お前はどつなんだ……』

『……すまねえ、脚がやられた』

脚をか……それなってしまうてはもう戦闘は無理だろうな。

『気にするな、後は俺一人でやる』

『……死んだら許さねえからな』

『おう、じゃあ切るぞ』

念話を切り、思考を奴にだけに集中させる。……  
さて。

「これで周りに誰もいなくなったし俺を見ている者は奴だけになったか……」

俺はあいつらに嘘をついていた。俺は俺達の実力じゃ倒せない、武装隊が来るまで持ちこたえればいいと言ったが、実は倒す方法があったのだ。それは諸事情で隠していた力を使えば可能なのだ。

「これだけは使いたくなかったんだけどな……仕方ないか」

この能力は制御が難しく危険過ぎるに使いたくは無いのだがこのままでは俺も、避難している市民も死ぬ運命にあってしまつかもしれない、だから使う。

「おい、お前！」

「ヒヤ？」

「死にたくなければ、全力で防御しろ！俺だってまだ完全に制御が利かないからな」

奴の防御力だったら全力で殴っても死ぬことは無いだろう、だから全力でいく！

「フウ……」

構えを取り残った全ての魔力を練り、深く呼吸する……。

（残った魔力からして使える時間は約五秒……短いが一発あれば十分だ……いくぞ！！）

「ハアアアーーーーー！！！」

練った魔力を開放する。すると俺の身体を青い光が包み込んだ。

「……いくぞ！」



俺が使った能力とは一定時間の間身体能力が百倍になるというものだ。

この力を知ったのは五才の時だ、この時期に俺は武術を習い始め一人で自主練しているときに、先程同じ青い光が俺を覆ったのだ。どうすればいいのかわからず母さんに電話をしようと思いを覆ったのだ。瞬間携帯は粉々に砕けたのだ、この時何が起きたのかよくわからなかった。軽く握ったつもりだったのに粉々に砕けたのだ。

この時はまだ制御の仕方わからずどうすればいいのか戸惑ったが一つだけ分かったことがあった、それはこの力は危険な物だということだ。それから直ぐに力は消えて俺は気絶したのだった。

どうやらこの力は魔力を消費して発動するみたいで当時五歳の俺の魔力量なんて微々たるものだったからすぐに切れたのだ。

それからこの力をすぐに母さんに相談した、母さんが言うにはこれはレアスキルという奴らしいが、この力の出所はすぐに想像できなかった、あのチャラ男のダーツだ。アイツは転生する際に能力をやるとか言ってたからな、これがおそらくそうなのだろう。

「たくつ……使わずらいのをくれやがって、次会ったとき殴ってやる……」

この能力を知った母さんは誰にも言わないようにしる言った。どうしてかと訊いたら教えてくれなかったが何かややこしい事があるのだろう。まあ多分だが母さんはレアスキル持ちだと管理局に知られたら半場強引に局に入れられることを危惧したのだろうな。

まあ、そのこともあってずっと隠してきたのだ、一応ONとOFFの使い分けができるようになってから暴走をすることだけは無いのだが。

「ハア……でも、これで終わったんだ。後は境界が解除され

るのを待つて……」

あ、そういえば助けに来た局員にどう説明すればいいんだ……俺が倒したといったら能力のことがバレてしまいかもしれないし……

と、あれやこれやと考えていた瞬間……

ドンッ

「ガハッ!?!」

俺は突如来た衝撃で大きく吹き飛ばされたのだった。

「グウ……!ま、まさか、まだ立てるのかよ……!」

先程まで倒れていた奴は立ち上がりデバイスを構えていた、目は大きく見開き血走っている……これはヤバイな。

「グルアアアアアア!」

「ガアッ!?!」

奴の放ったスフィアが左腕に当たり爆発した。腕に激痛が奔る、そして腕は血塗れになり動かせなくなった。

「うっ……!」

クソッ……奴はバケモンかよ。

「ガアアアアッ!?!」

「ガハツ!？」

何度もスフィアが俺に当たり爆発する、その度に激痛が奔り、俺の身体はボロボロになっていく。何度も気絶しそうになるが、痛みで起こされる。

「ヒヤハハハハツ!!」

くそ……コイツ俺を騷って楽しんでやがる……。

。だんだんと意識が遠のいていく、血を流しすぎたか……。

「ヒヤハハツ」

ゴリツ!

頭に何か押し付けられた……足か。踏みつけんじゃねえよ。

それに眩しいんだよ、何だよそれ、目が霞んでよく見えねえんだよ。

「ヒヤハ、ヒヤハハハハハ!!」

この光、魔力光か、つうことは俺、死ぬのか?ここで……はは、二度目の人生も短かったな、十二年か……ゴメン母さん、帰るって約束果たせそうにないや。

「死ねえ……!!」

そういや、あいつらとの約束も破ることになっちまうか……  
・わりい、先逝くわ。

死を覚悟し目を閉じた、そのとき。

バリイーン！！

「あ？ガアッ！」

結界が破れた。頭を踏みつけていた足はなくなり、その代わりに誰かに抱きかかえられた。何があったんだ……。？俺はゆつくりと地に寝かせられる。霞む視界の中に金髪の少女を見た。そして彼女は。

「時空管理局本局執務官フェイト・T・ハラオウンです。あなたを逮捕します！」

そう言った、そして俺の意識は途切れたのだった。

〈 s i d e   f a t e 〉

「あれか！」

全速力で飛んで市街地の真ん中にドーム状の空間が見えてきた。あれが結界か、こんな大規模なものを街の中で発動するなんて……。・とりあえず今は市民の確保を優先にする！

「いくよ！バルディッシュュ！！！」

『 Yes , s i r .   Z a m b e r   F o r m 』

「撃ち抜け雷神！ハアアアア！！！」

結界を破壊して一気に突入する！

『Jet Zamber』

ザンバーフォームのバルディッシュで結界切り裂いた。結界は破れ私の視界に入ってきた光景は犯人と思わしき人物が血塗れの少年を踏みつけながらデバイスを向けていた。先端には魔力が収束されていてすぐにでも撃ち出されようとしていた。

「バルディッシュュー！！」

『Sonic Move』

一気に加速して男性をザンバーの腹で殴り飛ばした。そして血塗れになった少年を保護する。……酷い怪我……早く衛生兵を呼ばないと。

念話で救護班を呼び、軽い回復魔法をかけて止血だけしておく、これで救護班が来るまでは大丈夫だろう、私は少年をゆっくりと地面に寝かせる。そして……。

「時空管理局本局執務官フェイト・T・ハラオウンです。あなたを逮捕します！」

そう言い、こんな酷いことをした犯人に言い放ったのだった。

「ガアアアアアアア！！！」

「いくよ、バルディッシュュー！」

『Yes, sir』

許さない、絶対に捕まえる！そう心に誓い私は駆け出したのだっ  
た。

無茶と無謀は違っつてのを理解したよ、この身で……。（後書き）

はい、またもや出してしまいました原作キャラ、しかも主役級の方を……で、でも執務官だから何かの事件で地上にいてもおかしくないかなと思いまして彼女、フェイトさんにしました。

でもこれまで投稿した話を見直してみると話のテンポ早すぎですよね？ちよつと急ぎすぎたかな……改定したほうがいいのか少し悩んでいます。どうすればいいんでしょうかね？

まあ、そのことも考えながら次の話も書いていきますので次回の更新で会いましょう、では。

知らない天井だ……っていうのはもう使い古されているか(前書き)

書きあげましたので投稿します。

では、本編どうぞ！

知らない天井だ……っていうのはもう使い古されているか

「どこだここ？」

目が覚めると、見知った天井ではなく知らない天井だった。

「てか何で……それに確か俺は……」

奴の攻撃で死に掛けて……って！そうだ！！

「み、皆は！……ウギイ！？」

勢い良く起き上がった瞬間、身体に激痛が奔った……。特に左腕の痛みが酷かった、よく見てみると左腕には包帯がグルグル巻きにされていた……。

「っ、つう~~~~~~~~」

い、いてえ……。ち、治療はされているみたいだが、やっぱり痛い……。と、とりあえず誰か呼んだほうがいいかな……。

えーと、ナースコールは……。

ガラッ

ん？誰だこの人、看護師ではなさそうだし、もしかして病室を間違えたのか？

「あつ……。よかった目を覚ましたんだね、今ドクターを呼んでくるから！」

「え？あ、ちよつと……」

行つちまつた……あれ？金髪？……なんか引つ掛かるな……なんでだ？

とりあえず戻ってくるまで待つておくか。

「うん、特に異常も無いね。これなら一ヶ月くらいで完治できるよ」

ふう……よかった、もつと時間がかかるのかと思つたぜ。

「しかし君は頑丈だね、普通あそこまで攻撃を受けたら一ヶ月で済まないんだけどな」

「あ、あはは、頑丈さが取柄ですから」

う、運が良かったんだな俺。まあ死ぬかと思つてたしな……

コンコンッ

「ん？誰だろう。はい、どうぞ」

「失礼します、あの、もう大丈夫ですか？」

ドアを開けて顔だけを覗かせたのは、先程の金髪さんだった。て

か、よく見たらあの人の格好、管理局の制服じゃねえか、しかも黒！………執務官かよ、とんだエリートさまじゃないか。

「ああ、容態も安定しているし大丈夫だよ。それじゃあお大事にね」

「あ、はい。ありがとうございます先生」

先生は小さく手を振りながら出て行った、それと入れ替わるように執務官の人が入ってきた。

「えーと、怪我、大丈夫？」

「あ、はい。大丈夫であります執務官殿」

とりあえず敬礼をしておく、階級が違いすぎるからなしておかないと。

「あ、楽しんでて、怪我もあるんだし」

「はっ、わかりました」

とりあえず偉ぶるような人ではなさそうだな。

「でも良かったよ、助けたときは相当危険な状態に見えたから心配したよ」

「え？じゃあ、俺を助けてくれたのは執務官殿ですか？」

「うん」

やっぱりか・・・そんな気がしてたんだよな。気を失う寸前に見た金色の髪、この人だったんだ。

「助けていただきありがとうございます」

深々と頭を下げる。あのままこの人が来なかったら俺は死んでいたので、感謝しないと。

「あ、頭を上げて、それに助けるのは当たり前のことだし・・・」

「わかりました、でも助けてくださいまして本当にありがとうございます」

「うん・・・あ、そういえばまだ自己紹介もしてなかったね。私はフェイト・T・ハラウン、知ってのとおり時空管理局執務官です」

「自分はヴェント・カグラ、陸士候補生であります」

再度敬礼する。俺より少し上なのか？でもそうだとしたらこの年齢で執務官だなんて相当なエリートじゃないか。すげえな・・・。

「それじゃあ、ヴェント君、目覚めたばかりで悪いんだけど君に訊きたい事があります」

先程までのホワツとした表情から一転、真剣な表情となる。これが執務官の顔か・・・。

「はい、昨日の事件のことですね」

「え？昨日？・・・あ、そうだった君は確か」

ん？何か変なこと言ったか俺？

「ええとねヴェント君、驚かないでほしいんだけど、事件が起きたのは昨日じゃなくて一昨日なの」

・・・はい？

「え？一昨日？」

「君はね丸一日眠ってたの」

「・・・マジかよ」

と、時計は・・・うん、買い物に行った日から二日たっている。現実かよ・・・。

「え、えっと、大丈夫？」

「あ、はい・・・大丈夫です。で、訊きたいことは？」

「あ、うん。昨日の事件の大体のことは君のお友達に訊いたから理解しました。でも彼らの情報は一部空いていて」

まあ、そつだよなあいつらは負傷して一旦下がらせたしな、それに最初にもデバイスを取りに行かせてたから情報が所々抜けているか・・・。

「わかりました話します。奴との接触時間が一番長かったのは俺ですから……あの、今回の被害を教えてくださいませんか？あれからどうなったのか気になって」

「うん、分かった。今回の被害だね、街に被害が出たけど人的被害は君と一緒に戦ったお友達の三人だけ。あ、お友達は二人とも軽傷だったから昨日退院しました」

そうか……被害なかったのか、よかった。

「あ、犯人はあの後私が無力化して捕縛したから、これでいいかな？」

「あ、はい」

「それじゃあ、まず訊きたいことは……」

こうして事情聴取が始まった。まあ、俺の情報が役に立つかわからないがな。

〳〳side 〳〳〳〳〳〳

〳〳 〳〳〳〳 〳〳

「ドクター、例の局の施設から逃げ出した実験体が捕まったようです」

「ふむ、そうか……で、結果は？」

「効果は出たようです。魔力量も上がりリンカーコアも活性化して  
いました、ですが精神に異常をきたしたようです」

「ふっ、それはそうだ、あれは元からそういうものなのだからね。  
それを局の科学者がぶれが改悪したらそうなるものさ」

それにあれは既に完成された技術なのだ、なのにそれを改善しよ  
うとするなど愚の骨頂だ。

「ドクター、報告書を……」

受け取った報告書の情報を眺めると気になる記述があつた。

「ふむ……ヴェント・カグラか……能力は全て平均的、  
なのだが……」

実験体の身体にできた拳形の痣……実験体を捕縛したプロジ  
エクトFの遺産は大剣のデバイスで他の二名の訓練生もデバイスも  
剣と杖型で攻撃したためこの様な痣ができるのは不可能だ。

「ふむ、一体どのようにつけたのだろう……」

実験体の防御力は一般局員では傷を付けることは困難なほどだ、  
なのにアレほどの痣……。気にはなるが、それ以上の興味は出  
ない。どうやら彼も私にとってどうでもいい部類の人間だろう。

「ドクター？」

「いや、何でもない」

何か私を楽しませてくれるものは無いのだろうかね……………。

〕〕 side vent 〕〕

「なるほど…………じゃあ、あの男は始終あの調子だったわけだね」

「はい、理性が完全にぶっ飛んだ感じでしたけど設置型のバインドを置くなどの戦闘行為はこなしていましたので若干ですが冷静な部分も残っていたのだと思われます」

俺の思ったことを報告していく、ハラオウン執務官もそれを熱心にメモっていく。まあ、それはあいつらの説明が下手だったため情報が整理できなかつたらしい……………全くあいつらは、説明くらいはしっかりしろよ。

「ありがとう。これで調査を進めることができるよ」

「お役に立ててよかったです」

ふう…………デバイスのデータが破損したから口述での報告しかできなかつたけど、ちゃんと説明できてよかつたぜ。

「うん、でも君もだけど無茶したらダメだよ。相手はBランクとはいえ立派な魔導師なんだから」

「え？Bランク？」

A以上ではないのか？

「どうかしたの？」

「……それ変ですよ、奴の戦闘能力は明らかにAランク以上ですよ」

「……詳しく教えて」

執務官殿でも気づかなかったのか、まあ俺との戦闘でかなり消耗していたからな、それもあるんだろう。

「奴は力カオの……俺の仲間の一人なんですけど、あいつの攻撃の最大出力は最低でもA+以上はあります。なのに奴はそれを簡単に防いでました、それも何度も」

「……続けて」

「はい、もちろん使い慣れないデバイスだったので威力が下がっていたと思うんですが、それでも奴のシールドは堅すぎた、それに……」

「それに？」

「保有魔力量です。奴は全力の攻撃とシールドの展開、それをずっ

と続けていました」

スフィアによる弾幕に砲撃を連続でだ、Bランクの魔力量では不可能だ。

「……………それが本当なら、確かにおかしい話だね」

「はい」

あの魔力量で考えられるランクはAAAクラスだ、なのに記録ではBランク……………どうなってるんだ。

「こんなこと言ってすみません。捜査の邪魔でしたね」

「ううん、ありがとう。君のおかげで事件のことがよくわかったよ」

「そう言ってもらえたら幸いです」

「うん、じゃあ私は行くね。捜査の協力ありがとうね、それとお大事にね、未来の同僚さん」

「はい」

そう言いハラウン執務官は出て行った。ふう……………なんか緊張したな。もう一回寝ようかな……………。

}} side fate }}

ボタンッ

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

さっき聞いたこと情報、これが事実だったらとして、そのことをいれて頭の中で計算する。

「魔力量が爆発的に上がるなんて考えられない、あるとしたら……」

違法研究によるもの、もしかしたら今回の事件はそれが元凶なのかもしれない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・これはもっと深く調べる必要があるそうだね」

でも、それも難しそうだな……今回の事件、地上本部が捜査をするって形になったから動きにくいよ……こういうときに地上と海の仲の悪さが邪魔になる。

「でも、ここで下がったもつと大変なことが起きるかもしれない。今回以上の事件が……」

はやてに相談してみよう、何かいい手があるかもしれない。

そう思う私は廊下を早足で歩き始める。

「あ、そういえば拳型の痣のこと訊くの忘れた……まあ、大丈夫かな？」

偶然当たったのかな、でも彼、きっと数年もすればいい局員になれるかな。

〕〕 side vent 〕〕

「ううううヴェントオ」

「か、母さん、離して……」

ハラオウン執務官が出て行ったすぐ後に勢いよく扉が開かれた、するとそこには涙を目に溜めた母さんが立っていたのだ。

母さんはまるでロケットのような速度で俺に突っ込んできて抱きしめたのだ。

母さんの抱擁は別にいいんだが、今の俺の体は傷だらけであり特に左腕は重傷なのだ、だからとても痛いのだ。

「だ、大丈夫なの、痛いところない？何か母さんにしてほしいことはない？」

「ま、まずは体を離して……傷に響く」

「あ、ご、ごめんね」

ふう……助かった。

「し、しん、心配したん、ヒック、だからね。ずっと、仕事も身に入らなくて……」

「…………ごめんね母さん、心配かけちゃって」

泣かせちゃったな…………何やってるんだろ俺。泣かせたくないから管理局に入ったのに。

「ホントごめんね母さん…………」

「ヴえ、ヴェントオ…………」

ひしつと俺に縋りつき涙を流す母さん、俺はそれを抱きしめ返す。

「ヒック…………グス…………」

「母さん…………」

ガラッ！

「ヴェント君大丈夫…………夫」

「おおい、ヴェント！無事…………か」

「あらん、お邪魔だったかしら？」

突然の訪問者はあの三人だった。ジョニー以外の二人は俺と母さんの姿を見て固まっている。どうしたんだ？

「あ、あわわわ?!」「ごめんなさい！」

「ヴェント……このリア充」

「はいはい、男の嫉妬は醜いわよ、ほら行きましょう」

「は、離せジヨニー、俺は奴に鉄槌を！」

「それなら私が付き合っただげるわよ、それじゃあ行きましょうね」

「あああああ」

「……どうしたんだ一体？いや、ちょっと待てよ、今の俺と母さんの今の状態、それに母さんの容姿はどっからどう見ても中学生……これって誤解されてるよな、絶対。」

「ちょっと待てお前らぁ……！」

誤解だぁ……！！

知らない天井だ……っていうのはもう使い古されているか（後書き）

お母様登場wwこれで訓練校時代の山場を超えました、すこしペー  
スが速いかもしれませんが早く原作本編に入りたいです。  
では今回はここまで次回の更新で。

誤字脱字などがありましたらぜひご報告ください。

リア充爆死しろって言うけど、リアルに考えるとかなりえそれってかなりエグイ更新が送れ大変申し訳ありませんでした。それでは本編どうぞ。

11/4 一部修正しました。

リア充爆死しろって言うけど、リアルに考えるとかなりえそれってかなりエグイ

「さて……いっくか、ギンガ」

「うん！」

二人で掌を拳で叩くとパンツと乾いた音が響く。

俺が退院してからもう数ヶ月経ち、訓練校での生活ももう少しとなった。時が過ぎるのは本

当に早いな、長いと思った一年があつという間だ。

「手加減はしねえぞヴェント、ギンガちゃん！さあ行くぞジョニー

！」

「ええ！私頑張っちゃうわよん！！」

向かい側にはカカオとジョニーがデバイスを構える。

これから俺達四人の訓練校最後の模擬戦が始まる。卒業前の実力テストみたいなものだ。

「それでは双方、準備はいいか？」

俺達の間には教官、そして周りにはギャラリーの同期生達。最後の目玉だ注目も集まるわな、これは。

「……はい！」「……」

「よし、それでは……」

始まるか……さて、やっぱり最後は白星で飾りたいな。

『ヴェント君、作戦は？』

『各個撃破だ、俺がカカオとやる』

『了解！勝ちましょうね』

『ああ』

ギンガと念話で軽く作戦を決める。射撃が出来ない二人組みだ、いつもどおりシンプルな戦法だ。さて、そろそろ始まるか。

「始め！！」

「でりゃあーーーー！！」

教官の開始の合図とともにカカオが突っ込んできた。いつもどおりだな！カカオは大剣型のデバイスを振り下ろす。ちなみにこのデバイスはあの事件のときに使ってた物だ、本来だったら返すはずだったのだがデバイスショップの店主がカカオとジョニーのことを何故だか気に入ったらしく、無償で贈られたそうだ。あの二つって高級品だぞ、それを無償で……ずるいな。

振り下ろされる大剣型のデバイスを俺は拳で……。

「オラアッ！」

ギインッ！！

殴り弾く、拳は魔力でコーティングしているので怪我は無い。剣を弾かれたカカオは驚いてはいるがすぐに立て直し今度は横薙ぎに

剣を振るう。

「ハアツ!!」

「ふっ!」

「うおっ!?!」

それを下の屈み避けるのと同時に足払いをかける。するとカカオは盛大に地に倒れた、このまま!

「っ!!」

倒れたところに攻撃をしようとした時、右腕が何かに絡まった感触があった、しまったこれは……。

「チェーンバインドよ。カカオちゃん!!」

「おっっ!!」

「くっ!!」

倒れていたカカオはもう起き上がり炎を纏った剣を振り上げていた。くそっ、バインドが硬い、避けるのは無理だ!

「喰らいやがれヴェント!!」

「このまま直撃を喰らうかと思ったとき。

「させないよ!!」

「っ!？」

カカオを邪魔するためにギンガがこちらに猛スピードで突っ込んできた。

「ハアアアアアア!！」

「ぐうっ!！」

左腕のリボルバーナックルは激しく回転し魔力を加速させ、拳の威力を増幅する。ギンガは速度を乗せた一撃をカカオに叩きつけた。しかし寸前にシールドを張られギンガの攻撃を防がれてしまった。

「くうゝ……や、やるねギンガちゃん!でもそんな攻撃じゃ俺は倒せな……」

「ハアア!！」

「え?グオツ!？」

ギンガの攻撃はこれで終わらない加速の勢いは殺さず、もう一回殴った。シールドは砕け散り拳はそのままカカオの腹に突き刺さった。

「カカオちゃん!！」

「余所見は禁物だぞ」

「っ!！」

ようやくバインドが解けた俺は力カオに気を取られているジョニーに接近した。

《Hard Beat》

「ラウンドシールド！」

ガンッ！

拳とシールドがぶつかり魔力の火花が散る。やっぱジョニーのシールドは硬いな、俺の一撃じゃ破れないか、だったら。

「何度も叩くまでだ！」

《Hard Rush》

「おおおおおお！！！」

「くっ………！！！」

ガガガガガガッ

拳の連激、魔力強化された攻撃は連続でシールドの一点に集中される。するとシールドに徐々にと輝が入り始める、そこに全力の一撃を。

「オラアッ！！！」

「ぬっっ！？」

叩き込んだ、俺の拳はシールドを突き破りジョニーを殴った、だ

がデバイスで防がれたのでダメージは少ない筈だ、やっぱりそう簡単にはいかないか……。本来なら追撃するべきなのだがそれは止めバックステップで後ろに下がる、するとカカオが俺のいた位置に飛び込んできた、やっぱり狙ってやがったか。  
いったん距離を取りギンガと並び構えを取る。

「やるじゃねえかヴェント、ギンガちゃん」

「そっちもねカカオ君、ジョニー君」

「やっぱり強いわねん、二人とも」

「フツ、お前達程ではねえよ、主席ペア」

カカオとジョニー、この二人は信じられないことに今期の訓練生の中でトップの成績を誇っているのだ、あの事件以来カカオが単独行動を控え、ジョニーとの連携を重視した戦法を取るようになったのだ。自分のせいでジョニーに怪我をさせたのが堪えたのだろう。それから元々ポテンシャルの高かった二人だったのでメキメキと成績を伸ばしていきトップへと躍り出たのだ。

「でも今日は負けないわよ、最後まで勝ちつんだから！」

「ヘッ！そう簡単に勝たせないぞギンガちゃん！」

「そうね、この面子で戦うのは最後になるわねん……。私頑張っちゃうわ！」

みんなやる気だねえ。まあ俺もだけどな。さてと、勝つにはどうすればいいかね、一対一に持ち込んで長引くだけで俺たちが不利

になるしな、魔力的に……。なら短期決戦に持ち込むし  
かないな。

『ギンガ、アレやるぞ』

『アレ……。わかったわ』

念話で短く伝える。実戦で使うのはこれが初めてだ、ぶっつけ本  
番だが勝つならこれしかないだろうしな、ギンガもそれを理解して  
賛同したんだろう。

『じゃあいくぞー！』

『ええ！』

「カードリッジロード！」

カシユカシユツ！！ギュリリリ！

カードリッジを二発ロードし、リボルバーナックルのスピナーが  
激しく回転し魔力が加速する。

俺も拳に魔力を集中させ、突撃体勢に入る。

「へっ！これで決めるつもりか。だったら俺たちも手加減なしだ！  
ジヨニー、いくぞー！」

「ええ、いくぞゴリアー！」

カカオは大剣に激しい業火を纏わせ、ジヨニーは魔方阵を展開す  
る。あいつらも最大の攻撃で迎え撃つつもりだ。

周りで見ていたやつらも静かになり空気が張り詰める。お互い動

かずに出るタイミングを計る。そのときギャラリーの誰かが後ろに後ずさった時。

ペキ

「「!!」」

小枝を踏んだ音が切欠となり俺とカカオが前へと出た。カカオは燃え盛る大剣を上段に構え俺を迎え撃つ。

「オオオオツ!!業炎……!!」

まだまだ、タイミングを合わせろ……。

俺はまだ拳を前に出さないこの作戦はタイミングが命だ、だからまだまだ……。

「一閃ツ!!」

振り下ろされる大剣、凄まじい熱が俺の肌を焼く。まだまだ……後、三秒だ……2……1……今だ!!

《Shell Gauntlets》

「でりゃあ!!」

「なっ!?!」

ギャリリリ!!

左の拳を前に突き出した。ただし大剣ではなく大剣のすぐ横の空間にだ剣は俺の腕を滑るよつに軌道を変えられ、行き場を失った攻撃はそのまま地面に叩きつけられた。

「まだまだだ!!」

「な、うおおっ!?!」

カカオの襟を掴み一本背負いの要領で投げ飛ばす、行き先は……

「え?ちょ、ちょっと、ゴフア!?!」

魔方陣を展開したいたジョニーにだ。まさかの攻撃に戸惑いジョニーはカカオとぶつかり倒れた。

「ギンガ!!」

「ええ!!」

俺たちは二人を前後に挟みこむよう配置につく。

「は、早く退いてカカオちゃん!!」

「お、おう、すまねえ!!」

急ぎ立ち上がる二人。でも………。

「な!?!」

「ば、バインド!?!」

俺とギンガは立ち上がったあいつ等二人を纏めてバインドに捕ら

えた。ジヨニーがいるからすぐに解除できるだろうが数秒は時間が稼げた、これだけあれば十分だ……とどめだ。

『ヴェント君！』

『ああ！』

俺とギンガは同時に駆け出す、ギンガはローラーブーツの出力を最大にし加速、俺はアサルトステップで前方へと跳び出す。

「ハアアアアアアッ！！」

「ぜ、全力で防御よ、カカオちゃん！」

「あ、ああ！」

身動きが取れないあいつ等は防御を固めた、止められるものなら止めてみる！これが俺たちの連携技！

「ダブル・インパクト！！」

前後から同時に俺たち全力攻撃は二人が張ったシールドをいとも簡単に破り直撃した。

「ギャアアアアアアッ！？」

決まったな。ドサツと二人が地面に倒れる音ともにそう確信した。

「そこまで！勝者、カグラ・ナカジマペア！」

教官の宣言により模擬戦は終了した、俺とギンガは勝利したのだ。  
った。

「イテテテテ……ちくしょー負けちまった」

「ええ、まさかカカオちゃんを投げてるなんて思いもしなかったわ……」

今日の訓練も終わり食堂の一角で食事を取る、面子はいつも通りの俺、ギンガ、カカオ、ジョニーの四人だ。

「勝てたねヴェント君！」

「ああ、そうだな」

「くそぉ〜」

「フッフ、最後の最後に負けちゃったわねん」

喜ぶギンガ、悔しがるカカオ、それを見て微笑むジョニー、この一年でよく見た光景だ。でもこれもあと少しで終わってしまう、少し悲しいものだな。

「あ、そうそう。ねえ今度の休暇、みんなどうするの？」

「休暇か？」

ギンガの言う休暇とは、卒業間近にある一週間の連休のことだ。

「ん〜？俺は家に戻るぜ、親父たちに帰って来いって言われてるからな」

「私は漢女道の総本山に行くわ、師匠に修行の成果を見せるときなのよ」

カカオのことはわかったがジョニー、何だよその漢女道ってのは……。

「むふふふ、それはな・い・しよよ、ヴェントちゃんが漢女道に入ってくれるなら教えてあげてもいいけど……」

「結構だ」

「あらん、残念」

嫌な予感しかしないのでこれ以上聞くのは止めておこう。

「ヴェント君は？」

「俺か？俺は母さんの付き合いについていく感じかね」

「お母さんに？」

「ああ、局のお偉いさんやらが開くパーティーに出席しなけりゃいけないんだよ、面倒くせえ」

ああいう場って嫌いなんだよな、全員腹の中に黒いもんを大量に抱えて作り笑いでニコニコしているのは。

「あ、あはは。す、凄いなヴェント君」

「お前って、やっぱりお坊ちゃんなんだよな……」

「さすがカグラ・インダストリーの御曹司よね、玉の輿狙っちゃおうかしら」

「お坊ちゃん言うな、それにジョニー、俺の半径三メートル以内に近付くな」

「やん、冗談よ」

「冗談でも言うなよ、実際俺の素性が皆に知られてから女子たちがアプローチしてきて困ってたんだよ。全員玉の輿目的で、男子からは『このリア充が！』とか言われるけど、こんなのもよくねえよ、全員目がギラついて怖いんだよ、変わるなら変わってやりてえよ。」

「まあ、俺はそんな感じだ。で、ギンガはどうなんだ？」

「私はスバルと一緒にお父さんの所に遊びに行くんだ」

「へえ……ん？確かお前の親父さんって局員じゃなかったけ」

クイントさんの旦那さんも局員だって母さん言ってたな確か。

「うん、だから見学も兼ねて行ってみるの、卒業後の参考になるかなって思ってたね」

「そうか、休暇が終わったならその話も聞かせてくれよ」

「ええ、わかったわ」

俺も勉強になると思うしな。

「はあ、早く休暇にならねえかな」

「そうよね、私も師匠に会うのが待ち遠しいは」

俺以外は休暇が楽しみみたいだな、おれは憂鬱だよホント。まあ、親孝行だと思っでいくしかないよな……。

チケットの予約もしとかないとな、えーと確かミットチルダ臨海第8空港行きだったな。部屋に戻ったらやるか。

はあ……ゆっくりしてえぜ。

しかしその願いは届くことはなく俺はあの事故に巻き込まれたのだった。

リア充爆死しろって言うけど、リアルに考えるとかなりえそれってかなりエグイ  
低クオリティですみません、はい。

ただいま絶賛スランプ中、あーでもないこーでもないと何度も書き直したりしました。

今回はS t s本編の始まりである空港火災事件の話となります、次はなるべく早く更新できるように頑張ります。  
それでは次回の更新で。

あ、あれが名高き魔王砲か……恐ろしいな。(前書き)

お待たせ？しました。様々なトラブルで更新できませんでしたでしたが解決したので更新いたします。  
それでは本編どうぞ！

あ、あれが名高き魔王砲か……恐ろしいな。

「ハアハア……」

俺は燃え盛る空港の通路を進む、左右に分かれた道を右に曲がる  
うとしたが炎が上がり道を塞ぐ。

「っ！……こつちもダメか」

仕方なくまだ安全な左に曲がる。向かう先は第二ロビー、出口で  
はない。こんな危険な場所にいるのではなく避難すればいいのだが  
そうはいかない、なぜなら……。

「ギンガーーーー！スバルちゃーーーーん！」

まだこの空港内にいるだろう二人の名前を大声で呼ぶ、が返事は  
返ってこず聞こえるのは炎の音だけだった。

「こつちにはいないのか……早く探し出さねえと」

クソッ、何でこんなことになったんだ。

ことの始まりは一時間前のことだった。

〓〓One hour ago〓〓

「じゃあ、迎えは遅れるんだね母さん」

『ごめんねヴェント、急な会議が入って……しかもこんなときに限ってクラウスさんもギックリ腰で休んでて……』

申し訳なさそうな声が通信機の向こうから聞こえて来るそう、本当だったら母さんが迎えに来てそのままパーティー会場まで行くはずだったのだが、母さんは仕事が入って来れなくなったみたいだ。それと俺も昔からお世話になっていた運転手のクラウスも動けなくなっているみたいだ。

「いいよ別に、一時間か二時間くらい潰せばいいんだろ？ だったら大丈夫だよ」

『うう〜ごめんねヴェント〜。な、なるべく早く仕事終わらせて迎えに行くからね！』

「うん、わかったよ母さん、じゃあ切るね」

『お母さん頑張るからね！』

母さんはそう言って通信は切れた。あの気合の入り方だったら一時間程度で終わるだろうな、母さんあんな容姿だけど仕事できるからな。

「さて、どうするかとりあえず土産屋をぶらぶらと廻るか……  
ってあれ？」

あそこにいるのってもしかして……。

「ギンガ？」

「え？あつ、ヴェント君！どうしてここに」

「いや、前に言ったとおりパーティーにな、お前は……親父さんの所にか」

「うん。もしかして同じ飛行機だったのかもね」

「ああ、そうかもしれないな……ところでスバルちゃんは？一緒に行く予定だったんだろ？」

「この前の話のときに俺はそう記憶していたんだが……」

「あつ！ねえヴェント君、スバル見かけなかった？」

「え？いや、見かけなかったが……」

「そう……はあ、どこ行っちゃったのよ、もう……」

あーこの流れはもしかして。

「はぐれたのか」

「うん……少し目を放した際に」

やっぱりか、スバルちゃん行動力がありすぎだからな。でも面倒なことだなこの空港無駄に広い上にこの人ごみを探すのには骨が折れるぞ。

「アナウンスは？」

「さっき頼んだけど反応は無し」

「携帯は？」

「ダメ……」

絶望的だな、おい。

「はぁ……しょうがない、探すの手伝ってやるよ」

「え、でも悪いよ。ヴェント君にも予定があるんじゃない……」

「迎えが来るのが遅くなってな、時間をどう潰すか悩んでいたところだ。だから手伝ってやるよ」

スバルちゃんのこと心配だな。

「ヴェント君……ありがとう」

「気にすんな。じゃあ手分けして探すか、携帯はいつでも連絡が取れるようにしとけよ」

「うん！じゃあお願いねヴェント君！」

「ああ」

ギンガはそう言い駆け出していった。

「んじゃ、行きますかね」

とりあえず土産屋を中心に行こう、もしかしたらいるかも知れないしな。

・

・

・

・

「スバルちゃん……ここにいないか」

んー、当てが外れたか？それともこちら側にいないか……  
まあ、とりあえずもっとよく探してみよう。

p i p i p i p i

ん？通信、ギンガからか、もしかして見つかったか？

「はい」

『あ、ヴェント君そっちはどう？』

「ダメだ、見つからない。そっちもか？」

『うん……もう、どこ行ったのよスバル……』

「まだ探してないのはどこだ？」

『えーと……第三ターミナル』

「俺もだ、いったんそこで合流しよう」

『うん』

そこにもいなかったらもう一度探すしかないな……しかしほとんど広いなココは……。

グラッ

んっ？今一瞬地面が揺れたような……。

ドカーンーーーーーッ！！

「!?!」

ば、爆発!?しかも大きい!窓の外を覗くと第三ターミナルから煙が上がっていた。爆発はあそこで起きたのか。

突然の爆発により一瞬の静寂が訪れる、何が起きたのか分からずに戸惑う人たち、そしてざわめきは徐々に大きくなっていきそして……。

「……わ、わあああああ!?!」「」「」

パニックに陥った、恐怖に駆られた人々は逃げ出すために我先にと出口に向かい大波となった。

事故か?それともテロか?どちらにしる危険なものには変わらない。

「ギンガ聞こえるか!おいつ!」

まさか爆発したところにいたりしないよな！

『ヴェ、ヴェント君……』

っ！……よかった無事か。

『す、スバルは……まさかあそこに……』

やばい、ギンガの精神が不安定になっている、とりあえず落ちつかせないと。

「落ちて着けギンガ、まだそうだと決まったわけじゃ……」

『わ、私探して来る！』

ブツツ……。

「ちょ、ま、待てっ！ギンガ、オイッ！！……くそっ！切りやがった」

現在第三ターミナルからは煙と火の手も上がっており危険な状態なのが分かる。あんな所に何の装備も無しに行くのは危険すぎる。

「クソツ！休暇ぐらいはゆっくりさせろよ！！」

俺は懐から待機状態のデバイスを取り出し人波に逆らって第三ターミナルへと駆け出したのだった。

くく現在くく

「くそつ、どこ行きやがったんだ」

第三ターミナルから上がった火はその範囲を広げていき空港全体にまで及んでいる。

「熱いな畜生！オーイツ！！ギンガー、スバルちゃーん！！」

デバイスはすでに展開し、簡易のバリアジャケットも身に着けているがやはり熱いものは熱い、汗が頬を伝っていく。

「こつちにはいないのか……！！オーイツ！！」

……。。返事は返ってこずただ俺の声だけが木霊する。ところが。

ゴンゴンッ！

「！」

今、何かを叩く音が聞こえた！ただ物が崩れただけか、それか誰かいるのか！もう一度。

「オーイツ！」

ゴンゴンッ！

聞こえた！やっぱり誰がいる……こっちか！

ゴングゴングッ！

音がするほうへ行くとそこにはドアがあった。

「誰かいますか！」

「た、助けてくれ！ドアが、ゲホッ……開かないんだ！」

逃げ遅れた人か、ドアが変形して開かなくなっているみたいだな。だっいたら少し強引だが……。

「ドア正面の位置からからなるべく離れてください！今からドアを吹き飛ばします！」

「あ、ああ」

頑丈そうな金属製のドアだな、少し本気でいくか！

魔方阵が足元に展開され魔力が練られていく、そして……。

「ハアアアア！！」

『H a e d B e a t』

ドゴオンッ！！

ドアは枯葉のように吹き飛ばされ壁に衝突した。俺は急ぎ中に入り逃げ遅れた人達の容態を確認する。

「大丈夫ですか！」

俺は急ぎ中に入るとそこには人が五人いたその内の一人は子供で暑さにやられてグッタリとしていた。

「あ、ああ・・・」

「自分は管理局の者です」

「おお、管理局の！」

「た、助かった・・・」

「これで戻る！」

最初は俺が子供だからか怪訝な顔をしたが局員であることを告げると一気に安心したのか活気が戻った。とりあえずは・・・。

「動かないでくださいね・・・っ！」

『Shell Barrier』

俺はこの人達にドーム状の防御魔法を施した。この魔法は一定時間熱や衝撃から内部の対象を保護することができる、これならこの人達を守ることができる。ただ魔力の消費量が大きすぎるのがネックなんだよな。

「これでしばらくは大丈夫です」

「あ、ありがとう」

— 先ずはこれでいいだろう、でもいつまで持つかは分からないからな・・・ 早めに救助を頼のまなくてh・・・。

「おい、誰がいるかー！ー！ー！」

「いたら返事をしてくださいー！」

！！ いいタイミングで来てくれた、救助隊か！

「こつちです！来てください！！」

大声で局員を呼ぶ、これでこの人達は助かる。

「大丈夫ですよ、これで助かります」

「あ、ありがとう」

「いえ……ところで」

俺はスバルちゃんかギンガの容姿を詳しく説明して行方を知らな  
いか聞いた。もしかしたら知っているかもしれないと思ったからだ。

「……すまない、私たちも逃げるのに必死でその子達のご事は  
全然……」

「そうですね……」

やはり情報は無いか……もしくはもう避難したのか？

「ねえねえにーちゃん」

「ん？なんだい？」

母親に抱かれた女の子、黒髪のツインテールの子が俺に話しかけ  
てきた。暑さを防いだので元気を取り戻したみたいで

「ウチ見たよ」

「っ！そ、それ本当！」

「うん、青い髪のお姉ちゃん、見たよ」

「どっちに行つたか分かる？」

「大きな女神様の像があるところ」

大きな女神像・・・第三エントランスホールか！

「ありがとう！・・・え」と

「ジークリンデ・・・」

「ありがとうジークリンデちゃん！」

「管理局です助けに来ました・・・って君！どこへ行くっ?！」

「後はよろしくお願いします！」

あの場を消防隊の人達に任せて俺は駆け出した。行く先は炎が激しいけど構っていられない、バリアジャケットに回す魔力量を増やし炎の中に突っ込んでいった。

無事でいてくれよスバルちゃん！

「スバルちゃん！！どこだーっ！」

……クソツ、どこだ。

辺りを見渡しても見えるのは燃え盛る炎だけ、人の姿は無い。

ドオオオンッ！！

「！？……急がないと」

火が引火してさつきから爆発が頻繁に起こっている、いつ崩壊するか分からない状況だ。って、ん？あれは！

「スバルちゃん……！？危ない！！」

俺はようやくスバルちゃんを見つけ出した、でもタイミングがヤバかった。スバルちゃんの後ろには巨大な女神像、それが今倒れそうになっていた。スバルちゃんは先ほどの爆風で横に飛ばされた横転し動けないでいる。

(くっ！……間に合わない！)

あの力を使ってもこの距離じゃ遠すぎる。

傾きスバルちゃんへと倒れる女神像、急ぎ駆け出すが間に合わない。ダメなのか……！と思った瞬間、桜色のバンドが女神像を縛ったのだった。

「よかった間に合った……助けに来たよ」

上を見上げると宙に浮かぶ白いバリアジャケットを纏った少女がいた。俺は彼女を知っている、航空戦技教導隊、エースオブエース・

・・・高町なのは。知らないほうがオカシイくらいの有名な人物だ。

「でも、助かった……………」

彼女がいなければ今頃スバルちゃんは女神像の下敷きになっていただろう。

「よくがんばったね偉いよ。もう大丈夫だからね…………安全な場所まで一直線だから！」

高町教導官はスバルちゃんの元に降り二・三言話してバリアを張りデバイスを天井へ向けた。一直線ってまさか…………て、天井を撃ち抜くつもりか！？い、いや、教導官の噂が確かなら不可能ではないと思うが…………でもそんな無茶は普通はしな…………。

「一撃で地表までいくよ！」

『All right・Load cartridge』

やっぱりかぁ……………！しかもご丁寧にカートリッジを二発も使ってるし！！

収束されていく魔力、それは凄まじくこの前の事件の男のとは桁違いなのは明白だった。でもこれならすぐに脱出でk…………ん？ピシピシッ！バコンッ！

「なっ!？」

『master!』

「え、しまった!？」

天井の一部に亀裂が奔り落ちてきた、しかも落下地点はスバルちゃんがいる所だ！高町教導官は魔力を収束していて動けないでいる、クソツ間に合えっ！！

「あ、ああ、イヤアアア！！」

「オオオオオツ！！」

能力を発動させる、加減はできないので全開で、俺は地面を蹴り跳んだ。高速魔法じゃかからないようなGを身を感じながら弾丸のように飛んでいく。そして……………。

「オラツ！！」

スバルちゃんの頭上数十センチのところまで巨大な石塊に拳を叩きつけた砕いた。常人には不可能なことだが能力を発動した俺の力全の一撃で何とか砕けた。破片が飛んだがスバルちゃんには高町教導官が張ったバリアがあつたのでまったくの無傷だった。

「ハアハア……………ま、間に合ったか……………」

「ヴえ、ヴェント……………さん？」

「ああ、探したぞスバルちゃん」

俺はスバルちゃんに微笑んだ。

「き、君は……………」

「自分はヴェント・カグラ訓練生であります。とりあえずここは危険です今は脱出を優先してください、高町教導官」

天井が崩れてきてるんだ悠長に話している暇はない。

「う、うん！レイジングハート！！」

『Buster set』

「デイベイン………」

収束された魔力が今。

「バスタアーーーーー！！」

放たれた。放たれた魔力は天井を突き破り空へと奔っていった。  
……これがオーバースの力……か。

「さあ、いくよ………」

高町教導官はスバルちゃんを抱き上げるが……そこで問題が発生した。

「……えっとカグラ君はどうしよう………」

そう、空を飛んで逃げる予定だったのだが高町教導官は一人しか抱えられないのだ。もちろん俺は飛べない。

「あ……えっと、浮遊魔法つてあります？」

「え？あ、あるけど……」

「だったらそれをかけて牽引してください、これを持って」

俺はデバイスの手首あたりの穴からワイヤーを引っ張り出す。何かに使えるかなと思いつけておいたのがまさかこんな所で役に立つとは……。

「あ、うん」

『Floater』

ピンク色の魔力に包まれると俺は浮遊した。

「じゃあ行こう」

「はい」

先導する高町教導官に牽引されて俺は空へと飛び立ったのだった。

それからは無事安全な場所に降ろされ俺たちは助かった。スバルちゃんと俺は救急車に乗せられ病院に搬送された。

それからギンガも無事に救助された、実はこの時ギンガを助けたのはなんとハラOWN執務官なのだ。この前の事件のときにも助けてもらったので二度目になるな、なんか縁でもあるのか？でもギンガも無事でよかったです。

それよりも今は……。

「グスツ、ヴェントオ……」

泣きながら抱きついて来る母さんをどうにかしなければ、周りの視線が痛い！

ていうか俺の休日入院でお釈迦になったよ、畜生！！俺に休息の時間を————！！

でもいったい何が原因でこの火災は起きたんだろうな、後日報道された時も詳しいことは発表されなかったしな。まあ、どうでもいいか。

火災の原因、それが四年後に起きるとある事件につながっていた。だなんてこの時の俺はまったく知らなかったのだった。

あ、あれが名高き魔王砲か……恐ろしいな。(後書き)

はい、ネット環境のトラブルにより更新ができず、遅れてしまい申し訳ありませんでした。

今回は色々とキャラを出しましたが、まずは魔王さま、ゲフンゲフンツ……主役であるのはさんとVividに出てくるジークリンドを何気に出してしまいました。反省はしていません！後悔はしまくり(ry

次回で訓練校編は終了して正規部隊編になると思いますのでよろしくお願いいたします。

では次回の更新で。

ナイフって振り回す奴ってどうみても素人だよな。まあプロがいたらいたで怖い  
今回から108部隊編に入ります、そして狸が参上します。仔狸で  
ありませんよ。

ナイフって振り回す奴ってどうみても素人だよな。まあプロがいたらいたで恐い

「ここか、108部隊の隊舎は……」

「うん、正式名称は陸上警備隊第108部隊。私たちが配属される部隊だよ」

あの空港火災事件から数週間、俺たちは陸士訓練校を無事卒業し、正式な管理局員となった。

「確かお前の親父さんがいるんだよな？」

「うん」

「そうか」

まさかギンガと同じに、しかも親父さんがいる部隊に行くとは思っていなかったぜ。神の野郎、そこまで俺が嫌いか。

「でも、卒業式の時凄かったね」

「言わないでくれ、思い出したくない」

そう、卒業の日。

~~~~~

「「ヴェント」ちゃん（！）！」

「うおっ!?!」

「何でお前は海に来ないんだ、俺たちは運命共同体だろ」

「お別れなんて嫌よ」

「は、離せ!カカオ、海に行くのはお前の意思だろ!てかスカウトされたのはお前等なんだから当たり前だろ!

そしてジヨニー!貴様は俺の制服のボタンを根こそぎ持っていくとすると、これまだ着るんだぞ!」

「ヴェントオ(ちゃん)」

「放せ!」

バキッ!!

「ぐへえっ!?!」「ぶるうあ!?!」

「.....ヴェントオ(ちゃん)」

「うっとおしいわ!」

~~~~~

こんな感じであのやり取りを何十回もやらされたのだ、涙と鼻水塗れのあの二人が迫ってくるんだぞ殴るしかないだろ。

「でも意外だったよね、今年の卒業生の半分が海行きだった」

「そうだよな、教官が言うには例年じゃありえない数字だったらしいぞ」

「そうなんだ」

今年、つまりは俺達の期の訓練生なのだがここ数年の中じゃ一番の出来だったらしく、成績上位のペアだった者は軒並み海の方に持っていかれてしまったのだ。カカオ達もそうだ、あいつ等は結果的に主席ペア卒業したための一番に海からスカウトが来たのだ。まああの二人は実戦に出せばすぐに使えるので当然だろう。

ちなみに俺達は五位ペアだったのにスカウトが来なかった。いや、正確に言えば俺だけには来なかったのだ、どうやらギンガには誘いがあったらしい。大方俺は魔力保有量の少なさではぶられたのだろう。まあ、海に行きたいとは思わないがな。

「まあ、突っ立てないで早く行くか」

「あ、うん。そうだね」

で、スカウトのあったギンガは俺が誘われなかったことに憤慨しスカウトを蹴ったらしい、勿体無いことにな。そのおかげでペアは解散せず正式採用された部隊まで一緒となったわけだ。

シュインツ。

自動ドアを潜り中に入るとそこには一人の男性局員が立っていた。あの人は……。

「お、来たか。指定時間十分前、まずは合格か」

この人俺達を待っていたのか？とりあえず敬礼しておこう。

「本日付けで陸士108部隊に配属となりましたヴェント・カグラ三等陸士であります」

「お、同じくギンガ・ナカジマ三等陸士であります」

「陸士108部隊ゲンヤ・ナカジマ三佐だ」

「……え？ナカジマ？あ、ああっ！そ、そうだこの人ギンガの親父さんじゃねえか！ま、まさかもうファーストコンタクトかよ！？」

「部隊長に代わって君達の入隊を歓迎する」

「は、はっ！」

ナカジマ三佐の敬礼に俺たちはさらに背筋を伸ばす。な、なんか緊張する。

「ま、堅苦しいのはここまでにしてだ」

ナカジマ三佐はニヤリと笑う。

「よく来たな、陸はいつでも人手不足なんだ目一杯扱き使ってやるからな覚悟しろよ」

「はい！」

「じゃあ、まずは二人ともIDカードの更新してこい」

「IDカードの更新？えっと、それってここでできるんじゃないんですか？」

配属される部隊でできるって聞いたがそれじゃダメなのか？

「どっいうことですか？おとうs・・・ナカジマ三佐」

「お父さんでも構わねえぞ、今いるのは俺たちだけだからな」

「け、ケジメです！」

「そうかそうか、偉いぞギンガ」

「あ、頭撫でないでよー！」

親子のやり取りを見て苦笑する、完全にかかわれてるなギンガ。

「えっと、ナカジマ三佐それで何故ここでできないのですか？」

「おっとそうだったな。いや、IDカードの更新機が昨日から故障しちまってな。相当古いやつだったからな騙し騙し使ってたんだが遂に寿命がきやがったんだよ。交換しようにも時間も費用も掛かるからな・・・」

「そうですか」

機材が古くて騙し騙し使うのは陸ではよくあることだ、唯でさえ資金は海や空の方に持っていかれるので陸の何処の部隊も何時も金

欠状態なのだ。

「面倒なことさせてすまん」

「いえ、そういうことならわかりました。では先にそちらに向かいます」

「ああ、そうしてくれ。少し遅くなっても構わんからな」

「了解しました。行くぞギンガ」

「あ、うん。それじゃあ行ってきますお父さん」

「おう、行って来い」

そう言い俺達を送り出すナカジマ三佐。ところでギンガ、呼び方がお父さんになってたぞケジメはどうしたケジメは。

まあ、さっさと行ってIDを更新しないと。じゃなきゃ入隊したことならないしな。えっと場所はと……。

「ふう……ようやく終わったな」

「そうだね」

IDの更新も終わり隊舎に戻るため俺たちは街中を歩く。予想以上時間が掛かったな、まあ受付の待つ時間の方が長かったただけ

どな。

「でも、これで私たちも立派な108部隊の一員だね」

「そうだな、でも認められるにはちゃんと頑張らないといけないぞ」

「わかってるよ」

これから頑張らないとな、まあ最初のうちは下っ端の仕事ばかりだけどな。と考えながら歩いていくうち大通りの広場に差し掛かった今日は一般的には休日なため人通りも多く、所々で店も出ていた。

「ねえヴェント君、お腹すかない？あそこの露店でホットドッグ買わない？」

「ん？ああ、そうだな。そろそろ昼時だな……買うか」

「じゃあ、私買ってくるね」

「おう」

ギンガのやつ目が輝いてたな本人は否定してるけどやっぱりアイツって食いしん坊キャラだよな。

ガシャン！

ん？何だ？

「ひ、引ったくりよー！」

「ど、退きやがれ！」

引ったくりだと？騒ぎのする方を見ると一人の男が女性物のハンドバッグを持ち走っていた。しかも男は空いた手のほうには刃渡り十五センチ程のナイフが握っていた。

男はそれを振り回しながら走る、広場に集まっていた人達は男の進行方向から逃げ道を開けていく。

「こんな密集してるところで刃物振り回すんじゃないよ、たくっ」

俺は駆け出し男の前に出た。

「管理局だ、大人しく刃物を捨て投降しろ」

と、警告するが。

「そこを退きやがれ！」

まったく聞く気もなくナイフを振り回しながらこっちに突っ込んできた。はぁ・・・乱暴なこととはしたくないんだがな。

「あああああ！！」

男がナイフを持つ手を素早く掴み取り後ろに回って間接ごと腕を捻った。

「イデデデデデ！？」

男は痛みから逃れようと身体を倒していき地面に倒れこんだ。それから手首も捻りナイフを取り上げる。ふう、これで無力化完了だな。

と、そこでようやくギンガが戻ってきた。

「ヴえ、ヴェント君大丈夫!？」

「おう、何も問題はねえぞ。あ、そうだとところでギンガ」

「え、何？」

ギンガ持っていればいいんだけどな……。

「手錠持ってねえか？俺忘れたみたいで」

「あ、う、うん。持ってるよ」

よかった、持っていてくれたか。じゃなきゃ応援が来るまで俺ずつとこの体勢でいなきゃいけなかったぜ。

「じゃあ、掛けてくれ。罪状は窃盗と質量兵器所持でいいと思う」

「う、うん、わかった。えーと、窃盗と質量兵器所持の現行犯であなを逮捕します」

「ち、チクシヨーーー!!」

ガチャツと手錠を掛けると男は雄たけびのように叫んだのであった。

あーそういえば捕まえたのはいいけどここって108の管轄外だったな、もしかして帰ったら叱られるかもしれないな……はあ。

「ハツハツハ、入隊初日から大活躍だなお前等」

「もう、笑わないでよお父さん！大変だったんだから」

「すまんすまん」

あの後引ったくり犯を引き渡してから時間も経ち今日の勤務も終了となった。で、現在俺はナカジマ三佐に連れられ隊舎の近くにある居酒屋に来ていた。

「カグラも遠慮すんなよ。じゃんじゃん頼め」

「す、すみません俺までご馳走になってしまつて」

「ん？ああ、気にすんな。いつもギンガが世話になっている礼と今日の活躍のご褒美だ。それにお前とは一度じっくりと話してみたかったからな」

「は、はあ……………」

話つてもしかして、昔のことか？やっぱ三佐は気づいてるんじゃないのかな……………だからじっくりと話したいって。

「むう、お父さん聞いているの！」

「おうおう聞いているぞ、なんだおかわりか？頼むからいつもみたいにバクバク食わないでくれよ。今月は金欠なんだから……………」

「そ、そうじゃないよ！もっつ！」

ガラッ

「ん？どうしたんだ？」

「お手洗いです！！！」

頬を赤くして早足でトイレに行ってしまったギンガ、やっぱり仲いいなこの親子、俺も親父がいたら……それはないか親父ってヒモだし。

「そういえば忘れてた、カグラ」

「は、はい」

二人になった途端ナカジマ三佐の声は真剣みの帯びたものになった。

「スバルを助けてくれたそうだな、礼を言う」

三佐は身体をこちらに向けて深く頭を下げた。

「あ、頭を上げてください三佐！助けたっていつでも殆ど高町教導官の活躍ですし」

「それでも助けたのには変わりないさ。実際スバルもカグラ、お前に助けられたって言ってたしな。だから本当にありがとう」

……親だな。親父ってこんな感じなんだろうな。

「・・・・・・・・わかりました。お気持ち受け取ります」

「ああ・・・・・・・・で、次からの話しが本題だ」

あれ？これが本題じゃなかったのか？

「久しぶりになるのか？まあ、直接話すのはこれが初めてだったな。お前のことはいつもクイントから聞いてたぞ」

ああ、やっぱり気付いていたか。

「さすがに分かってましたか」

「ギンガは覚えてなかったみたいだが、俺は覚えてたぞ」

「そうですか」

「ギンガには言ってないのか？」

「ええ、タイミングを逃したのもありますし、まさかここまで長い付き合いになると思いませんでしたしね」

仮ペアだけだと思ってしな。

「そうか・・・・・・・・シルフィーヌ、お袋さんは元気か？」

「ええ、元気ですよ。毎日仕事でバタバタしてますよちっちゃい体で」

「ハハツ、そうか相変わらず小せえのか。いつまでも大きくならねえみたいだな」

母さんは言っでなかつたけどナカジマ三佐も同僚かなんかだったのだから、三佐は母さんのことを聞くことに何か昔のことを懐かしんでいるように見える。クイントさんがいた頃の事を。

「毎年、アイツの命日に花をやってくれるのはお前だろ？」

「はい、母さんの分も一緒に持ってってます」

毎年ナカジマ家に鉢合わせないようにしながら朝早くに出てクイントさんのお墓に花をやっていいるのもこの人は知っていたようだ。

「ありがとな、アイツも喜ぶぞ。お前のこと気に入ってたからな」

「そうだといいです」

あの人のことだからこつちのこと茶化してそうだけどな。

「まあ、これからもよろしくな。同じ職場なんだ、相談くらいには乗るぞ」

「ありがとついでいます」

「なんかしんみりしちまつたな、親父！熱爛一つ」

「あいよー！」

ナカジマ三佐は店主に酒を注文した。しかしいいのか？明日も勤

務あるよな、大丈夫なのか？

「ホイッ、熱爛一つだよナカジマさん」

「おおっ、これこれ・・・親父、猪口もう一つくれ」

「あいよ」

「トツともう一つ置かれる猪口、なんで二つも必要なんだ？」

「ほれ、お前も飲め」

「え？い、いや俺は未成年ですし」

「いいってんだよ、俺がお前の年頃には酒なんか水のように飲んでたぞ」

管理局員が未成年に酒を進めるなよ。

「あ、あの・・・」

「それとも何か、俺の酒が飲めねえの「スベく・・・オゴア！？」

突然ナカジマ三佐が奇声を上げて机に倒れこんだ、な、何が・・・

「お父さん、何やってるのかな？」

後ろを振り返るとギンガがすごくいい笑顔で立っていた、正し目は笑っていなかった。

「ぎ、ギンガ……お前今本気で、殴らなかったか……」

「うん。未成年にお酒を飲ませようとする人に手加減はいらないから」

「こ、こええ……しかも本気ってお前の力つて下手したら俺より強いんだぞ、そんな力で殴られた三佐は大丈夫なのか？  
それにしてもギンガの笑顔がこええ……」

「お、親父……今日はツケで……ガクッ」

あ、気絶した。

「はあ……ごめんねヴェント君。私がいなかった間迷惑かけなっただけ？」

「ん？あ、ああ大丈夫だ、少し話をしただけだ」

「それならよかったけど……今日はもう戻ろうか、お父さんがこんなだし」

「あ、ああ……」

そうしたのはお前だろギンガ。てか本当に大丈夫だろうな三佐、死んでたりしないよな？

とりあえず会計はゲンヤさんのツケとなったので払わずに、俺達はゲンヤさんを二人で担ぎ居酒屋を後にしたのだった。

「とりあえず寮に戻るか」

「うん」

寮までそこまで遠くないので歩いて帰れるだろ。えっと確かここから真っ直ぐ行ってと……。

「ふう……疲れたな……」

何とか三佐を三佐を部屋まで送った後俺は宛がわれた自室に辿り着いた。部屋割りの関係で俺は一人部屋となった。まあその方が気を使わなくていいんだけどな。

まだ荷解きはしてなくダンボール箱だらけだが元は二人部屋だから広く寝るスペースは十分ある。

「明日も早いし寝よ、あれ？メールか」

カカオ達からか？だとしたらどうせ変なことしか書いてないだろ……って母さんからか。

内容は短めく『頑張れ』としか書いていなかった。

「母さん、もうちょっと書こうよ」

でもそれだけで頑張れる気分になる俺も現金なのかね？通信はできないだろうしメールだけ書いておこう。今日起きたことやギンガのことやナカジマ三佐のこととかを。

書き終わったら寝よう、明日のために。

「さて、明日も頑張りますか。じゃあ、お休み………ZZZ」

こうして俺は眠りついたのであった。

翌日、前日の記憶を失っていた三佐を見て冷や汗をギンガと一緒に流したのは内緒である。

ナイフって振り回す奴ってどうみても素人だよな。まあプロがいたらいたで恐い

どうも最近 fate/zero に嵌っている作者です。面白くてラノベを全巻纏め買いしてしまいましたwww

今回から108部隊編となります。ということでカカオとジョニーの出番はしばらくありません(え?)

あの二人はプロットの時点でそういう役回りだったので仕方ありません。まあstss本編の頃にはちゃんと絡ませる予定なので(どこぞの淫獣ようにちよい役かもしれないませんが)安心してください(何に?)

感想、誤字の報告などありましたらお気軽にコメントの方にお書き下さい。それでは今回はここまで、次回の更新で。

ブラック企業って色的には黒を通り越している気がするの俺だけか？（前書き

タイトルはあまり関係ないですよ？



・・・

「で、何で俺をココに呼び出した。まさかまた死んだとかふざけた事は言わないだろうな」

「いえ、あなたはちゃんと生きてますよ！まあ・・・毎日死にそうになるまで仕事をしてるみたいですけど・・・」

「・・・そうだな」

陸の部隊はいつも人材不足で大変だとは聞いていたが、まさかブラック企業並だとは思ってもいなかった。事務仕事に関しても報告書一枚書いている内に五枚増えるのは当たり前で、過労によって倒れるのは日常茶飯事、それなのに給料は少ない・・・ブラック企業の方がマシだと思えるくらいだ。俺とギンガも入隊早々大量の仕事を渡され過労で倒れたのは懐かしい記憶だ。

「そ、そんな事はどうでもいい、それより用は何だ」

睡眠時間をこれ以上減らしたくはないんだよ！

「分かりました、では手短にお話ししましょう。　さん・・・いえ、今はヴェントさんでしたか、あなたが転生する際にやった特典ルーレットのことを覚えていますか？」

「ルーレット？ああ、あつたなそんな事。で、それがどうした？」

実際、緊急時の際には使わせてもらっているぞ、それ以外のおときは使わないようにしているがな、まだ力の調整が甘くてな、要練習だ。

「いえ、ヴェントさん特典は二つだったのを覚えておられますか？」

「ん？二つっていうと・・・身体強化能力と金運だろ？」

俺が貰ったのはこの二つだけだったはずだが、後は前世の妹の幸運に使ってもらった筈だが・・・。

「あ、やっぱり勘違いなさっていましたか・・・」

「勘違い？どういうことだ」

「いえですね、ヴェントさん。あなたがルーレットで得た特典はハンドレット・パワーと金運ではありませんよ」

「え？そうなのか」

てか身体強化能力ってハンドレット・パワーで言うのか、覚えておこう。

「はい。いえ、度々あなたの様子を見ていましたのですがなかなか使う気配がなかったのもしやと思ひましてね・・・やはりでしたか」

「じゃあ何なんだ？もう一つの能力って」

「それを今から説明させていただきます。えーヴェントさんのもう一つの特典能力、それは『魔力結晶化』です」

「魔力結晶化？それって文字通り魔力を凝縮して結晶化させるって

ことだよな?」

それってどう使うんだ?

「その通りです。ヴェントさんにはその能力が備わっているのですよ。使い方はですね……」

それから小一時間ほどチャラ男から能力のレクチャーを受けた。  
要約すると

- ・使用者の魔力を結晶化する事が可能。
- ・結晶は自然消滅することはなくストックする事が可能。
- ・結晶の大きさは消費した魔力に比例して大きくなる。

との事だ。

「ところで使用方法はどうすればいいんだ、結晶作っただけでおしまいつて訳じゃないだろ?」

「はい。ちゃんと使用できますよ。使用方法は簡単です、使用する際に使用したい魔法の術式を選択して結晶に込めるだけで使用可能です」

「それだけか?」

「はい、親切設計なのですよ。あっ、それと使用する魔法によっては大量の結晶が必要となりますので注意してくださいね」

なるほどつまり砲撃魔法や大規模魔法とかになると使用魔力に比例して数が必要となるって訳か……。

「よし、大体理解した。次は作り方を教えてくれ」

「作り方も簡単ですよ、ただ掌に魔力を集中しておけば勝手に精製されますよ。今までヴェントさんはそれに近い方法をやっていたがそれは拳にでしたからね、だから今まで気づかなかったんですよね」

「そうなのか、確かに何時もは拳を魔力でコーティングするだけだったもんな。じゃあ試してみるか。」

「あ、時間のようです」

チャラ男がそう言うのと周りの景色が歪み始めた。

「そろそろお目覚めの時間のようですね。ではヴェントさん、次会うときはあなたが寿命を迎えたである事を望んでいますよ」

「ああ、世話になったな」

「いえいえ、アフターケアですよ。ではさようなら」

チャラ男が手を振り世界が暗転したと思った次の瞬間、俺は目を覚ました。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

無言で起き上がり目覚ましを確認すると時間は何時もの起床時間と変わりなかった。疲れは大分取れたがずっと起きていたかのような感じがして何か変な気分だった。

それ以前にあれば本当にチャラ男からの干渉だったのだろうか、もしかしてタダの夢だったりしてな。

「……試してみるか」

夢の中での話が本当だったか確認するために実行してみることにした。掌に魔力を集中させる、纏わせるんじゃなくて掌の真ん中に集める感じで。やること数分握った掌の中に何かを物を感じた、手を開くとそこには……。

「本当だったか……」

ビー玉サイズのような丸い結晶があった。本当にできたという驚愕よりも俺が思ったことは……。

「あー、申請どうしようかなー」

レアスキルになるよなこれって……はあ、メンド。手間がとてもかかるレアスキル申請をどうしようか悩んだいたのだった。

〳〳数カ月後〳〳

「ん〳〳、久々の休暇だあー」

ブラック企業以上の勤務を耐え向いた俺にようやく休暇が来た。申請自体はしていたのだが中々受理されず自分でも忘れていたほどだ。

「さて、今日は何をするか。母さんに会いに行く……は仕事の邪魔になるだろうから却下で、一日中部屋でダラダラと……ていうのも時間が折角の休みが勿体無く感じるな……」

んー……そうだ。

「久々にパーツショップ巡りでもするか」

決まりだな、そろそろデバイスのフルメンテの時期だしな。いや、一応隊にもデバイスマイスターはいるんだけどやっぱ自分でやらないと落ち着かないんだよな。俺は手早く着替えを済ませ財布を持ち寮を出た。

途中、今日は仕事の先輩方から呪詛めいたお言葉を貰ったが気にしない事にしよう。次の休暇まで頑張つて下さい。

・ ・ ・ ・ ・

「ふう……大量大量！」

いやーまさかあのパーツが中古で出回ってるなんて思いもしなか

ったぜ。

「少々値が張ったがこれで魔力循環効率が少しは改善されるだろうな」

「いやーいい買い物をした。とそんな事を思いながら歩いていたら。ドンッ！」

「うおっ!?!」

「キヤッ!」

注意力が散漫だったのか女の子とぶつかってしまった。俺は倒れなかったが女の子のほうは尻餅をついて地べたに座り込んでしまった。その周りには彼女が買ったのだろうアイスが地に落ち散乱していた。

「すみません、大丈夫ですか?」

「あ、は、はい!大丈夫です!ってあれ?」

「ん?あっ……」

「スバルちゃん?」「ヴェントさん?」

「うわぁー偶然ってあるもんだな!」

Side Teana

「ティアティア！この人がヴェントさんだよ」

両手にアイスを持ったルームメイト兼私の相棒が騒がしく帰ってきた、隣にはギンガさんと同じくらいの年齢の男の人が、スバルは器用に腕を絡ませて彼を引っ張る。

あの人がヴェント・カグラさんか・・・スバルから話は聞いていたけどあまり凄そうな人ではなさそうだな・・・。

「うっさいスバル！少しは静かにしなさいよ、まったく・・・」

「って、え？ヴェント君？偶然だね」

「よっ、偶然だな」

ギンガさんと軽く挨拶を交わすカグラさん。随分と仲良さそうね、関係は恋人・・・って感じでもなさそうね・・・スバルも分からないって言うてたし・・・一体どんな関係なのかしらね、気になるわ。

「えっと、初めまして。ヴェント・カグラだ、よろしく」

「あ、はい、ティアナ・ランスターです。よろしくお願いします」

カグラさんが差し出した手を握り握手する。落ち着いている人だな・・・私よりひとつ上だっけ？なんか凄く大人って感じがする。アイツ（・・・）とは違って・・・。

「で、今日は三人で買い物か？」

「はい、そうなんですよ！今日はティアも誘って！」

半場無理やりだったけどね、この子こっちが頷くまでずっと言い続けるから頷くしかなかったわ。ハア……。

「そうか。ところでさ」

「はい？」

「あそこにいるのって君たちの知り合い？なんかずっとこっちを見てるけど」

あそこ？カグラさんが指した方向を見るとそこには休日に来て会いたくないアイツがいたのだった。

〕〕 side vent 〕〕

「何でアンタがココにいるのよ！」

「俺は偶然ここにいるだけだぞ。何で怒っているんだ、あ、分かったぞ俺と会えて嬉しいんだn」

「うっさい黙れこのストーカー！」

「ハッハッ、ティアナはツンデレだな」

ランスターさんが銀髪の少年に暴言をはくのだが、まったく会話が噛み合っていないな。一応知り合いみたいだな……仲はどつなのかは置いといて。

「スバルちゃん、彼は・・・」

「あ、あはは。えっと彼は私たちと同じ訓練校のミカド・リュウガミネ君です」

「へえ、仲はいい・・・わけじゃなさそうだね」

ランスターさんかなりキレてるように見えるし。それにしてもリュウガミネだったけ？まったく話を聞こうともしないな、それでいて自分の自慢話しかしてない。・・・変わった奴だな。

「はい・・・入学当時からずっとティアナに対してはあんな感じでした」

「へ、へえ〜」

ずっとアレの相手をしてたのがランスターは・・・なんか、その、色々と頑張れよ。

「そんなに悪い人じゃないんですけど、ずっとあんな感じなんで、私もちよつと苦手なんですよね」

「そうなのか・・・」

でも誰とでも仲良くなれるスバルちゃんが苦手って、どんだけ変な奴なんだリュウガミネって・・・。

「ところでスバル、ストーカーってどういうこと？」

お、ギンガ。そのことは俺も聞こうと思ってたんだよ。

「ええと、リュウガミネ君って何でか、何時も私たちがいるところにいるんだよ」

「それってタダの偶然なんじゃないのかな？」

「私もティアも最初はそう思ってたんだけど。何回も何回も同じことが続いて……」

あー、それは確かにストーカーって言いたくなるな。

「そ、そうなんだ……」

俺たちは無言でランスターさん達の方を見る。あ、ランスターさんがリュウガミネの腹にボディブローをアレは痛い。でも直ぐに起き上がってちよっかいを掛けてくる。

……頑張れランスターさん、その手の相手は粘着質だから大変なことになるだろうけど。

「じゃあ、俺は行くわ」

女三人の中に男一人つてのもきつそうだからな、早々に撤退しよう。

「え？一緒に行きましょうよヴェントさん」

「もう、無理言わないのスパル！ヴェント君にだって予定があるんだから。ごめんねヴェント君」

さすがギンガ、ちゃんとスバルちゃんを止めたな。

「いいよ、スバルちゃんまた今度誘ってくれ」

「わかりました、また今度誘いますね！」

「ああ、ランスターは……忙しそうだし、よろしく言っ  
てくれ」

「分かりました」

まだ続いてるよ、おおっ今度は顔面にストレートが！いい拳して  
るな、あの子もストライク・アーツでもやってるのか？

「じゃあな」

「またね」

「はい、また！」

と二人に軽く手を振り歩き出す、とその時。

「っ！」

急に悪寒のようなものを感じ後ろを振り向いた、すると視線の先  
にはリュウガミネがこちらを鋭い目付きで睨んでいた……が、  
それは一瞬でリュウガミネは直ぐにランスターさんにちよっかいを  
掛け始めた。

……気のせいかな、でもさっき感じた悪寒は……。  
考えていてももしかない早く帰ろう。と心の中で整理をつけて俺は、

帰るため駅に向かうのだった。

ブラック企業って色的には黒を通り越している気がするの俺だけか？（後書き

更新遅くなってしましまして申し訳ありませんでした。最近忙しくて書く暇が全然ありませんもので……。

今回は主人公に能力を追加する話と謎に包まれたオリキャラを登場させました。このオリキャラに関しましては閑話で紹介したいと思います。

それでは今回はここまで次回の更新で！

感想などありましたらぜひ仰って下さい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9643w/>

---

魔法少女リリカルなのはStrikerS ~ 転生したら魔法？がある世界だった ~

2011年11月27日03時50分発行